眞匏祇

涅織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
眞匏祇

【Ｎコード】
Ｎ３６７６Ｘ

【作者名】
涅織

【あらすじ】
人間とは形こそ同じであれ、中身の全く異なった不思議な者たち。それを眞匏祇（まほうし）と呼んだ。これはそんな眞匏祇たちの物語。

～序章～　第一話　○×作戦

「なぁ、聞いたか？今日、転校生が来るんだってよっ」
「まじか！男？女？」
「おんな！」
クラスメイトの獅場と籐下が話をしているのが耳に入った。そのことを何気なく知っていた薪にとってはどうでもいい話ではあるが、実際少しだけ気にしていることがあると言えばあった。
「お？薪、どうしたぁ？」
「うっせ」
話に興味があると判断されたのか獅場が声をかけてきた。転校生が女だから反応したのかととやかく問い詰めてくる。薪はそれを呆れたように聞き流す。そんなことをしている間に担任が教室内に入ってきた。
「おら、いつまでやってんだ。お前らは中学生か？」
「ちがいまーす！」
全く以て中学生、いや子供としか思えない反応にこのクラスのレベルの低さに頭を抱える薪だった。騒ぎたい放題している生徒を何とかなだめて担任は教室内に一人の少女を入れた。そして黒板に名前を書いた。
「振葉穂琥さんだ」
薪はその名を聞いて鋭く反応した。しかしそれに気づく者は誰もいない。担任は獅場の隣を指してその少女、穂琥を誘導した。席に着く穂琥の姿を横目で見て薪は珍しく悩みにふけっていた。
　下校時刻になっても席を立たない穂琥にどうしたものかと頭を抱える薪。転校生というだけあって周りには生徒の山ができていた。
「穂琥って言うの？不思議な名前だね！」
「かわいいなぁ」
「いきなりナンパか？」

「ち、違うし！」
「うるさいよ、男子！穂琥ちゃんがかわいそうでしょ！」
珍しいものに集るというのは人間の本能か。仕方なしにこの騒ぎが収まるのを待つことにした薪であったが一向に収まる気配を見せない。聞きたいことがあるのだがどうにも聞きにいける状況ではない。小さくため息をついて仕方なく薪は立ち上がった。
質問攻めにあっている穂琥は少しうろたえていた。ここまで聞かれるとは思ってもいなかった。もともと家庭の事情で転校が多くてそういったことには慣れていたがここの人たちは今までとは少し違って大変だった。でもこうやっている中にとても暖かいものを感じていた穂琥にとっては悪い気はしなかった。
「あのさ、ちょっといい？」
「はい？」
突然声をかけてきた少年。ずっと教室の隅で静かに座っていた人だった。周りの反応を少しだけ確認するとどこか驚いているように見えた。
「あんた親はどんなヒト？」
突然妙なことを聞いてきたので驚いて目を丸くしてしまった。しかし、聞かれたからには答えなければと穂琥は声を発する。
「えと、私、ちょっと色々事情があって・・・。居ません」
あまり口にしたくない諸事情。その理由は親を覚えていないから。穂琥には昔から親がいない。今は義理の母と父に親切に面倒見てもらっている。そして本当の両親のことを何も知らない。決して義母たちが隠しているわけではない。幼かった穂琥が傷だらけで道に倒れていたのを今の家庭に見つけてもらい拾われた。穂琥としては記憶に残っていないくらい昔のこと。
目の前にいるその少年の目はどこか冷たく見えた。それからその眼をふっと伏せてそして温かみを帯びた目ですまなかったと言って席に戻って行ってしまった。呆然としていてはっとして周りの人に目を移したが、クラスメイト達も呆然としていた。そしてみんな一

様に声をそろえて言った。
「あれは薪じゃない」
初めてここに来た穂琥にとってそれがどういうことなのか全くわからないけれどどうやらここに居る人たちにとってもどういうことなのかわからないようだった。
「ちょっと、籐下、獅場！調べてきてよ！」
とある女子が二人の男子の名を呼んだ。一人は穂琥の隣の席の人。もう一人はその獅場という人と仲よさげに喋っていた人だった。彼がきっと籐下なのだろう。その二人も了承して先ほど声をかけてきた少年の元へ歩み寄った。
「なんでお前声かけたの？」
「悪いかよ」
獅場の質問に薪は適当にあしらうがごとく答える。
「いつもの薪だったら会話どころか見向きもしないじゃないか！」
籐下の言葉を完全に無視して帰り支度を進める薪。そんな薪の姿を見て二人はどうやら別の作戦に切り替えるようだった。
「よし、こうなったら〇×作戦だ！」
「は？」
獅場が指を天井に向けて高らかと立てた。そしてそれを得て籐下が咳払いをする。
「ごほん！ではいきます！今穂琥ちゃんのところに言った理由について。まず1！一目ぼれしました？」
「・・・は？そんなわけないだろう」
突然訳もなく質問し来た籐下に呆れたように返す薪だったが、籐下と獅場の会話を聞いてこの作戦の意図を読み取った。
「違うな。一目ぼれじゃないって」
「よし、じゃぁ次だ」
あぁ、こいつらは嘘がつけないと知っているから回答がどっちかしかないという質問を投げてきているんだと理解する。そしてそうとわかった以上ここで話を聞く義理もこたえる義務もない。薪はさっ

さと教室から抜け出した。
「あ、逃げた！待て！」
叫び声が聞こえたが薪の足についてこられる人間がいるはずもないので振り返ることもなく薪は家を目指して走った。

第二話　お達し

それから二か月。穂琥とは最初の接触をして以来一度も接触はしていない。もともとそういったことに触れる方ではないのでいつものことと言えばいつものことだったのだが。

「なぁ、薪。穂琥ちゃんのこと好きなん？」

「オレが？」

「だよなぁ。今時、女の子に興味持たない奴なんていねぇよぉ？」

「知ったことか」

獅場がだれたように言ってきた。拒絶しているにはそれなりの理由がある。しかし、その理由を言ってよいものではない。

「じゃ、オレは帰るから」

「おう、じゃな」

すぐにでも家に帰ろうとした薪だったが、そうすることができなかった。下駄箱のところで担任に捕まった。職員室まで連行された。

「二か月な、ずっと黙ってはいたが。やはり言おう。転入生は慣れていないんだ。慣れればな、いいんだが。声をかけたのに素っ気なくするのはやめてやれ」

担任は渋るように言う。薪がどういった生徒かは担任もよく知っている。学力優秀、運動抜群。つまりよく言うデキル奴という訳だ。性格も今回の話の題材であることを除けば周りから好かれる方である。だからこそ、今転入してきた少女の手助けをしてやることができればいいというのが担任の意見だった。

担任との話に随分と時間を取った。薪は担任に申し訳ない気持ちを抱きながら帰路に着く。そうしていると、校門のところで声を掛けられた。

「あの！薪・・・君、でいいかな？」

振り向くと穂琥がいた。今までのこともあってか多少は警戒をしているように少し遠慮しているように声をかけてきた。

思い切って声をかけてみたが、やはりいつもと同じように冷たい反応。しかし、少し間を置いてから返事をくれた。
「あぁ、いいよ」
それが会話を続けていいという訳はないことくらいわかっているが穂琥はたまらず言葉を続けた。
「前から聞きたかったんですけど・・・。最初の時、どうして私の親のことなんて聞いたんでしょう？」
穂琥の質問に薪は黙った。目を逸らすようにして回答を渋っていた。どこか戸惑っているようなその態度から自分はそれなりに拒絶されていることを実感する。
「あの、女の子って苦手ですか？」
「まー、苦手というか。極力接したくないんだよね」
「拒絶、ですか？」
穂琥の返しに薪は少し深めのため息をついた。機嫌を損ねてしまったかと焦ったが薪はだるそうに眼を穂琥へ向けて小さな声で言った。
「敬語、使わないでほしいんだけど」
「・・・わかった・・・」
「親のことを聞いた理由を今は言えない。確信もないし自信もない」
「そう・・・」
薪は言葉が浮いている気がする。心ここに非ず、と言った方が正解かもしれない。
「そうだ。オレからも質問」
薪から切り返してくるとは思っていなかったので驚いた。薪は穂琥がこんな時間までいたことを尋ねてきた。確かに生徒が下校する時間はとうに過ぎていた。
「あなたと、話がしたくて。普段素っ気ないけど時々思うの」
「何を？」
「本当は何か、言いたいんじゃないかなって。　あ、ごめんなさい！私勝手に！」
穂琥は何とも言えない気分に苛まれその場から走り去ってしまった。

翌日、薪が学校に向かって歩いていると籐下が後ろから声をかけてきた。籐下とは比較的この学校でも仲がいい方だ。
「おはよ。今日は元気ないな？」
「そうか？いつも通りだよ」
籐下は少し不思議そうな顔をしながら歩いていた。
ホームルームで担任がいきなり座席表を黒板に張った。
「突然だが、席替えだ。これからはこの席でやっていくぞ」
騒がしい教室内でさっさと自分の席に移動して腰を下ろしている薪は騒々しいクラスにため息をついていた。
「あの、隣、よろしく」
あまり聞き慣れない声が耳に入ってそちらに目をやると机を移動してきた穂琥が少しおどおどした感じで立っていた。
「あぁ、はいはい。よろしく」
穂琥が隣に腰を下ろした。それから担任へ目を移して頭を抱えた。これは紛れもなく担任の意図するものだと確信したからだった。
休み時間には籐下に茶化される。
「隣にされてんのなぁ。少しは慣れろって先生からお達しだろ」
「うるせぇ」
穂琥はどこか不安そうな表情を浮かべているがそれは今はそっとしておくべきだろう。薪としてはこの少女が『該当者』であるかどうかを見極める必要がある。そしてその見極めにミスは許されない。だから極力接しないで余計な感情が入らないようにしている。
薪が求めているものが穂琥の中にあるのか。もっと詳しく調べないとわかるものではない。それでもそれを確かめる方法がいまいちわからなかった。薪の求めているものは普通なら表に出ているものであるが、今の段階では奥底で眠ってしまっている。それを目覚めさせなければ到底手の出しようがなかった。

第三話　昔にあったこと

帰宅時。薪は橙に染まる空を見上げながら歩いていた。そんな時に耳に聞こえた醜い声。

「この前頼んだ分を持ってきてくれた？」

「は、はい・・・」

おとなしそうな男の子が恐喝にあっている、というシーン。よくあることだ。正直、薪の通っている学校は荒れている。正確には荒れていた。今はずいぶんと大人しくなって不良と呼ばれる輩もずいぶんといなくなった。それでもそれの残りかすは存在する。薪はそれを見て軽く過去を思い出す。

薪も転校を多く繰り返している。と言っても薪は親の事情とかそういった類のもではない。そもそも今の薪に両親は存在しない。とっくの昔に・・・。そんな薪があちこち転校を繰り返している理由として穂琥の中にあるかもしれないとあるものを探しているため。ある一定期間その場に留まりその探しているものが存在しないと判断すると再び転校。それの繰り返しだった。故にこの学校には馴染み具合とは比例せず来たばかりと言っても過言ではなかった。そしてこの学校に入ってすぐのことだ。

―お前、この学校に来たら俺らに挨拶するが常識だろ！

―・・・何？

薪が来たばかりの時はこの学校では転入生を奴隷として扱うのが制度として成り立ちかけていたようだった。教師も見て見ぬふりをするという始末。まぁ、相手が手におえない不良たちなら仕方のないことなのかもしれないと少しだけ薪は思っていた。しかしそんな薪の態度に怒りを覚えたか知らんがその不良たちは木製のバットを持ち出して薪に殴り掛かってきた。本来なら正当防衛として殴るところだったかもしれないが、薪にそれをすることは絶対にできない。

振り下ろされたそのバットを軽くかわしてバッドを抑える。
―動かない・・・！？
―お前らはガキか？いつまでもこんなことをしていちゃだめだろ
それからしばらく諭すようにその不良たちに言葉を投げかけた。何とかそれをくみ取ってくれたようで奴らは力を抜いてうつむいていた。それからはその不良たちも改心したのか知らないがごく普通の生徒になっていたので正直驚いたくらいだった。
　そういったことで転入生イビリは薪の時代で終わり。穂琥は運よくというか。ともかくそれを免れたということだ。しかしそれの残党はいくらでもいる。現に実際今目の前に。
「おい、やめなよ」
「あ？」
恐喝していた男が振り返る。泣きそうな男の子の顔を覗き込んで小さく微笑む。それを見て男は怒号を上げる。
「なんだよ！お前も盗られたいのか？！」
「そんなわけないだろう」
薪は肩を落とす。どうしてこうも知能が低いものか。
「薪君？」
ふっと後ろでした声に振り向くと不安そうな表情の穂琥がいた。予想外の外野の登場に薪は少し悩む。
「余所見かこら！」
そうしている間に男が殴り掛かってきた。薪はそれを見事に顔面に受けた。しかし一二歩下がる程度で大して効いていない。それにうろたえた男が焦った表情で下がる。
「これでも痛いんだからあまり殴るなよ。こっちはどんなにされても手出しができないからさ」
薪は殴られたところをさする。穂琥の方も男と同じように驚いている。普通だと、人間一人が顔面を思いっきり殴れば痛いだろうに。薪はその気配があまり感じられない。確かに口では痛いと言っているけれど。

「大丈夫・・・？」
「ん？あぁ、平気だよ。心配かけて悪いな」
そして男に向き直る。それから隅の方で丸くなっている男の子に目をやって微笑んだ薪の顔を見たとき、穂琥の中で何かが動いた。知っている気がする。最近知り合ったばかりのこの少年をもっと昔に知っている気がしたのだ。
「お前、ここはまぁオレが何とかするから家に帰っていいぞ」
「へ？！え！？」
「いいから、帰れ」
しっしっと言った風に手を振る薪に少し迷った風を見せながらも足を後ろにじりじりと動かし、しまいには少しだけ頭を下げてから駆け出した。男はそれを追おうとしたが薪が肩をつかんでそれを制止する。
「ほらほら。オレとまだ決着ついてないよ？」
男の顔に恐怖心がわいているのを穂琥は見た。どうやら薪に対して何らかの恐怖心を抱いたようだ。それにしても薪とは一体何なのか。穂琥には到底わからなかった。けれど心の奥で何かがもやもやしていて気持ち悪い。この変な感覚を何とかしたかった。薪がこの目の前の男を何とかしたら尋ねてみよう。前にどこかで会ったことありますかって、よくあるドラマのワンシーンみたいなセリフを。
　薪からしてみれば最早この男を動かすのはたやすい状況になっているが、穂琥がいる以上油断すると人質にとられてしまうかもしれない。だから薪は穂琥と男の間に立って男が余計な行動を起こさないようにしている。
「お、お前・・・何者だ・・・？」
震える声で男が言う。それを言ったらこっちとしてはおしまいだ。こんな不確定な存在が在るということをこの世界の人間たちは知らない。だからここではただの・・・。
「ただの人間だ」
薪がこの土地に来て唯一『嘘』を突き通すと決めたこと。嘘をつく

なら最後まで突き通さなければならない。嫌いな嘘をついている。だからこそ一つだけと心に誓い最後まで嘘であることを決め込む。
　こんな話をすればもうわかるかもしれない。薪は人間ではない。人間に姿かたちがよく似た全く別の生物。この世界ではフィクションの世界でしか生きていないちょっと特別な生物。
「まぁ、お前がまだ恐喝とかするというならオレも加減はあまりしたくねぇな」
薪が構えを取ると男は泣きそうな声を出しながら走り出して逃げて行った。その様子をため息交じりに見送る薪はこの世界の人間に呆れを感じていた。しかし。どこか笑ってしまうような感じもある。こうして脅しをかければ大抵は引いてしまうのだから。薪のいた祖国ではそういうことは全くなかった。
「あの・・・」
物思いにふけっていると穂琥から声がかかった。正直今、穂琥の存在を忘れていた。
「何？」
「私と薪君って・・・昔にあったことある？」
予想外の質問に表情を崩したことを後悔した。穂琥もそんな薪の表情を読み取って何かはっとした顔していた。
「あるの？」
「・・・・・」
薪は黙って何も言わない。言わないのではなく言えないのだった。もし仮にこれが単なる偶然で穂琥が何気なしに言った言葉だとしたら自分のことを語って良い訳がない。穂琥が探しているモノであると確信が出ない限り、余計なことは言えない。
　薪と別れてからただひたすら自分の中に沸く疑問と戦っていた。結局薪は何も答えてくれなかった。いや、別にそれでもいいのだけれど。薪は何かを隠している。何かを伝えたがっている。何となくそれだけはわかった。わかっている。でもそれが何であるかはわからない。むしろわかったら超能力かって話になってくる。仕方なく

穂琥は自分の家へ帰る。

第四話　もう平気

学校が何やら騒がしい。それに嫌な予感を覚えた薪は急いで階段を駆け上がった。自分の教室に入るとやはりどこか騒々しかった。

「何があった？」

近くにいた籐下に話しかける。籐下は薪が来たことを確認して小さな声で喋る。

「侵入者が来たらしい。このクラスじゃないんだけど。しかも2、3人怪我したって」

それを聞いて薪は教室を飛び出した。

「あ、おい！薪！相手は凶器を・・・って、いないし」

籐下は肩を落とした。

学内に侵入者。ならば殺気を持っている。それを探ればどこにいるかわかる。早いとこ見つけて処理しなければ怪我人がもっと出てしまう。それだけは勘弁だ。もう二度と、誰かが傷付くところを見たくない。いなくなってしまうことなどあってはならない。それが誰であってもどんな奴でも。

場所は特定した。薪の教室が二階で犯人がいるのが三階の一番端、つまり視聴覚室。薪は走ってその場に向かった。そして勢いよく視聴覚室の扉を開ける。

「誰だ！」

ナイフを手にした男が立っていた。いらだっているようにも見えるその男は腕に人質として少年を抱えている。階からして1年生だろうと推察し薪は体の力を抜く。そしてあたりの確認をする。教師が一人に一クラス分の人数。この中を暴れるのは危険がある。

「お前、何しにここへ？」

抑揚を抑えて男に尋ねる。男はナイフを振り回しながら薪に出ていくように訴える。どうやらこの男に話は通じないようだと判断した薪は、重心を下げる。それから勢いよく地面をけり男の方へ向かう。

呆気にとられた室内は薪以外のものは何も動いていなかった。犯人の腕を鷲掴み、少年の腕をつかみ引きはがす。彼には申し訳ないがそのまま後ろへ投げ飛ばした。勢いで転がったが慌てて教室の隅の方へ走っていくのが見えたので少し安心した。それから犯人に顔を向けた直後、右のほほに痛みが走った。しかしそれを無視し薪は男を押さえつける。

「ぐふっ」

抑えられた勢いで声が漏れた男はそれから動かなくなった。

「覇彌(はしもと)！大丈夫か？！」

教師が駆け寄ってくる。

「はい。大丈夫です」

「怪我しているぞ！」

慌てた様子の教師に言われて先ほどほほに痛みが走ったことを思い出す。先ほど男が二本目のナイフを取り出したことでほほを軽く斬られた。しかし感覚的にもう血は止まっているし、正直なところ、この程度の傷は薪にとってはどうでもいいほど小さなかすり傷だった。

騒動がとりあえず収まって男は見事に警察へと連行されていった。教室に戻っていた薪は警察の事情聴取から逃れることに成功した。

「薪、大丈夫か？その頬」

「あぁ、平気。もう痛くねぇよ」

心配して籐下が訪ねてきた。絆創膏を貼るまでもないと判断したのが悪かったのか逆に心配の種になっている気がしたが今更隠したところでどうしようもないから仕方ないんだけど。

薪はふと何かの視線を感じてそちらに目を移した。そこには目を丸くした穂琥の姿があった。

「何？」

あまりに凝視するので尋ねたが穂琥からの返答はなかった。首をかしげた薪の耳に何度も聞き、うんざりとしている響きが入ってきた。

「シン！」

穂琥が叫んだ言葉だった。薪はその言葉を聞いて穂琥へ顔を向ける。穂琥はひどく不安そうな表情をしている。それから勢いよく立ち上がると薪の方へと駆け寄ってきて薪の肩をつかむ。
「そうだよ、シン！私思い出した！いや、全部じゃない・・・一部だけ・・・でもそう！シンだよね！？」
「穂琥、場所を移すぞ」
「うん」
薪も立ち上がってさっさと歩いて行った。その後を追う穂琥。それを見つめるクラスメイト。すでに先ほどの事件が原因で下校が命じられていたので残っていた人もわずか数人程度だったのだけれど。
学校の屋上に上がって穂琥を見る。
「シン、大丈夫？私は、私は・・・。シン、すごく血まみれだったって・・・」
「もう平気だ。それにあれは・・・。いや、いい。とにかく思い出したようで何より」
「うん。シン」
「穂琥は・・」
「シン？」
薪の言葉を遮って穂琥が疑問そうな声を上げる。それに何と答えると再び薪の名を呼んだ。
「シン？　私の名前は？」
「は？穂琥だろう」
「え・・・？」
首をかしげて不思議そうな顔をする。それでやっと気づいた薪は頭を抱えた。
「あぁ、そうか。オレの名前は『薪』。その呼び方はもういいよ」
「薪・・・？」
「そう」
腑に落ちないなりに納得してくれたようだった。単純な奴だから問題ないだろう。昔からそうだった。知っているも何も穂琥は薪にと

って・・・。
「お前は大切なオレの妹だ。見つけるまでに時間がかかった」
「ううん。いいの。私も覚えていなかったし」
穂琥の笑顔。これが穂琥なのだ。そしてこの笑顔を封じていたのは薪自身。この土地で過ごすためには自分の生まれ育った環境のことを覚えていては厄介だから。こちらに送るときに記憶を消した。いや、封じ込めておいた。その封じたせいで表に出ずに随分と長い間探すことになった薪の探し物。そして再びこうして出会えた時にその封を解き、ともに生まれ故郷に帰ると決めていた。そう。『眞匏祇』の地へ。

～第一章～　第五話　キカン

激しい雄叫び。そのままドスンと地面に落ちる。たどり着いた場所、そこは眞匏祇の世界。少女はしりもちの結果腰を痛そうにさすりながら立ち上がった。そしてそんな少女の目の前に居る少年に向けて小言を言う。

「もっと優しくできないかなぁ～」

しかし、少年は少女が無事なことを確認し、傷がないなら行くぞと言って歩き始めてしまった。少女は慌てて立ち上がって少年の後を追った。

「ぶぅ・・・。心に傷がついた」

そんな文句を言っても少年、薪は足を止めずさっさと言ってしまう。ため息をついて仕方ないとして少女、穂琥は少年の背を追った。

失われていた記憶を何とか取り戻した穂琥は薪と共に生まれ故郷である眞匏祇の世界へと戻ってきた。そもそも眞匏祇と言う地球に住む『人間』にとっては不確かその存在が何であるかといえば。はるか昔に眞匏祇が地球に訪れた時、言葉を誤って似たような言語が地球で生まれた。それが『魔法』で実際『人間』にそれを扱うことはできないけれどそういった存在がいたと言うこと。

そしてその眞匏祇の生態。人間と見た目は何も変わらない。ただ人間と眞匏祇を見比べてもなんら違いなど分からない。しかしそう思うのはあくまで人間だけ。眞匏祇からしてみれば一目瞭然のこと。その違いはオーラと呼ぶか、気配と呼ぶか。そういった類のもの。眞匏祇の体からはそれが絶えず漏れ続けている。このオーラを眞匏祇の世界では眞稀（まき）と呼んでいる。眞稀は力を有していればいるほど大きく感じられ、有していなければ小さくなる。そしてこの眞稀を感知できる能力自体にも差が生じる。感覚が鋭敏ならば小さな眞稀も感知ができるという訳だ。そしてさらに能力値が上になればその眞稀自体を体の外に漏らすことなく『ゼロ』の状態にすることもで

きる。ただ、この『ゼロ』状態に至るまでには随分と力が必要となる。凡人にはできないということだ。そしてこういった眞稀を使って摩訶不思議な能力を行使する。

もう一つ、魂石（こんせき）と呼ばれるものを眞匏祇は体内のどこかに宿している。体内から体外への出し入れは比較的楽に行うことができるこの魂石は眞匏祇の命の源、エネルギーとなる。大きさはみな均一だがそれの密度や存在感が力によって異なってくる。眞匏祇はこの魂石を破損しなければ死ぬことはない。故に心臓を打ち抜かれたとしても即死することはないのが眞匏祇。つまり人間とは比べ物にならないくらいの生命力を持っていることになる。

とはいってもその肢体に怪我をして絶対に死なないわけでもない。その怪我によって魂石に支障をきたすこともあり得る。つまりはただ単純に人間よりも若干強固なだけ。それが眞匏祇という存在。

さて。説明が長くなってしまったが、とにかくこの地へ戻ってきた。薪にとっては久々の帰還、穂琥にとってはほとんど始めての帰還となった。

「どうしたの？」

歩いているうちに崖まで来てその下には広大な街が広がっている。どこまでも、どこまでも。そしてそれを見下ろして薪がどこか物思いにふけっているように見えたので穂琥が尋ねた。薪は物思いから帰ってきて少しだけ切ない表情をして広大な大地を見渡している。

「来ちまったな、って」

どこか諦めの匂いがする言葉に返す言葉はたった一つ。

「慤夸（こっか）として当然じゃない？」

「まぁ、そうだけど」

薪は目を細めて街々を見下ろしている。

慤夸とはこの眞匏祇の世界を統治する眞匏祇のこと。どの眞匏祇よりも強くあらねばならない。雄々しくあらねばならない。眞匏祇の頂点に君臨してこの世界を治めている、それが慤夸。そしてそれが現在は薪であるということ。

薪は目の前の崖を降りるべく、足を踏み出す。穂琥はそれを勢いよく止めた。
「ちょ、ちょ、待ちぃ！こんなところ降りるの？！」
声を上げた穂琥に対し、薪の目はとても冷たかった。面倒くさそうというか、馬鹿にしているというか。そして薪は吐き捨てるように穂琥に言う。
「お前はなんだ？眞匏祇だろうが。この位なら降りられるだろう」
「・・・・あ」
さんざん人間として生活してきた穂琥にとって、眞匏祇である情は少し薄い。よって眞稀を練ることをすぐに忘れる。眞稀さえちゃんと扱うことができればこの程度の崖なら降りるのはたやすいこと。準備を整えて薪と穂琥はその崖を降りる。
崖を降りて一息ついた穂琥だったが薪は表情を険しくした。薪は降りた直後に辺りにある異変に気付いたのが原因だった。
「どうしたの？」
「お前、眞匏祇として生きていく資格ない」
穂琥の疑問に薪は鋭く言い切る。それを受けて穂琥は薪の感性が鋭すぎるのだと文句を言おうとしたが薪に口を抑えられて喋ることができなくなった。抑えられたまま引き摺られるように物陰に身をひそめる。すると男が走ってきた。それから辺りを見回しながら疑問そうな声を上げる。
「おかしいな？確かに眞稀を感じたんだが・・・」
未だに眞稀を漏らしている穂琥に叱咤する薪。
「こっちの世界来たら眞稀を消せって何度も言っただろうが！」
小さな小枝がすごい剣幕で怒られ穂琥は小さくなって謝罪するしかなかった。男がこちらに気づいたら面倒だと思っていた薪だったが、男は予想外のところで足を止めて嬉しそうにして何かを拾い上げた。穂琥の見た感想からするとガラス玉のように見えた。ただ、今までに見たこともないほど美しく煌めいていた。男はそれを持ってその場を去った。薪が立ち上がって男が去って行った方を見つめながら

ぼそっと言う。
「何に使うかわからないけど。調べに行った方がいいな」
「あれ、何？」
尋ねた穂琥の言葉を聞いた瞬間薪の目が一気に冷たくなった。
「お前・・・確かに眞匏祇としてこっちの世界で過ごしたことが記憶としてないだろうから仕方ないことも多少は出てくると思うが」
ため息をついて、目を伏せながら薪が言う。それから鋭い瞳をしゃがんでいる穂琥へ向ける。向ける、というよりは見下すように睨む。
「あれ位の物は覚えておけ！」
必死で謝罪の言葉を述べる。よく薪には怒鳴られるが、なんだかんだ言って薪は優しい。だからこういった類のことで怒られてもちゃんと説明をしてくれる。今回だって例外ではない。
「あれは痲臨（まりん）だ。名前聞きゃぁわかるよなぁ？」
今回はどうやら二段階構想で叱られてからのようだ。
「ごめんなさい・・・・」
「ったく。少しは勉強しろってんだよ。地球での歴史とか覚えていたって本国の知らねぇんじゃ意味がねぇ」
薪は穂琥を軽視した後、いつもの表情に戻って歩き出してしまった。穂琥としては意外だった。いつもちゃんと説明をしてくれるというのに今回はあまりに頓珍漢だったためにさすがの薪も説明する気が失せたのだろうか。歩く薪の背を追う。
「あいつが何をしようとしているのかわからん以上、しようとしていることを探る必要がある。急ぐぞ」
「あ、ねぇ、痲臨って何？」
「後でな」
薪の話具合と態度、そして歩く速さから考えて、怒っているわけではないと判断する穂琥。きっと痲臨というものはとても力のあるものなのだろう。だから先ほどの男が何をするか不安がある。それをいち早く薪は解決へと導きたかったのだろう。

第六話　アカシ

薪は足早に男の後を追う。後ろをちゃんと穂琥がついてきていることを確認しながら。眞稀の扱いに慣れていない穂琥を突き放して走るのは危険すぎる。それになりより自分らの立場上、こんなところに居てはならない。慤夸は国を統治し雄々しくあらねばならない。こんなところで油を売っているようでは話にならない。それにそんな慤夸の妹が迷子になって走ることもままならないといったようなことは絶対にこの土地では起こしてはならない。この城下町から離れた辺鄙の場所では。

男を追ってたどり着いた場所は屋敷の様なものが立つ場所だった。先ほどの男の眞稀をこの屋敷の中から感知することができるのでここに間違いはない。薪ははて、どうやって入ろうか悩んだ。そうしている間に屋敷の中から眞稀を感じた。しかもこれは眞匏祇の眞稀ではない。物質より発せられる無機質のもの。つまり発したのは痲臨。薪ははっとした。そして急いで屋敷へ飛び込む。痲臨を使用してはならない。危険すぎる。今は穂琥のことを気にしている暇などない。

飛び込むとやはり痲臨を使用しようとしているところだった。しかし、薪の目からしてまだ使用には至っていないことが確認できた。よってそこまで焦る必要はないと判断し、少し落ち着く。やっとのことで穂琥が追いつき薪の横に着く。

「何者だ！」

叫ぶような声が響く。薪たちの侵入やっと気づいて怒号を上げていた。屋敷内には男が４名いた。そのうちの一人の男は怪訝そうな表情で薪の服装を見ていた。

「我々のやっていることに首を突っ込もうというのならただではおかんぞ！」

男が叫ぶ。薪は鋭い目つきで男を睨む。

「怪しい男を見かけたのでね。調査しに来ただけだ」
薪はそういって端の方で座っている男を見た。その男は不思議そうな顔をして薪を見た。会ったことがないという顔だ。それも当然のことだが。
「痲臨を拾っただろう？これはただじゃおけないと思ってね」
薪はそれを軽く述べる。しかし男たちは表情を怒りと焦りで埋めている。そして端に座っていた男は立ち上がって薪に叫びあげた。
「眞稀は一切感じられなかった！あそこに眞匏祗はいなかったはずだ！」
「もともとあの場に足を運んだのは眞稀を感知したから、だろう？」
薪の言葉に口ごもる。確かにこの男は眞稀を感知してあの場にやってきた。しかし眞稀があったであろう周辺まで来たらすでにその眞稀を感知することはできなかった。その代り痲臨を見つけてここまで持ってきたのだから。
　眞稀を消すことができるとわかった男たちは少し狼狽えているような様子を見せた。それを少し見てから薪は本題に突入する。
「痲臨を、持っているんだろう？何個ある？」
薪の質問に素直に男たちが答える訳もなく、見事に却下する。
「答えるものか。力ずくで聞くか？やっても無駄だぜ。絶対に言わな・・・」
「言う気がないなら聞かないさ」
男の言葉を遮って薪がさらりと言う。男たちはさらに表情を崩す。
「なんだと・・・？」
「なんだよ。力ずくでも聞いて欲しいのか？」
「そんなわけ・・・！！」
薪の言葉に歯噛みしながら答える。それをまるでこの場では空気になってしまったのではないかと思われるくらい存在感を消されている穂琥は見ていて薪の優勢具合を小さく笑う。薪に口で勝とうと思うだけ無駄だということを穂琥はよくわかっている。
「さて。じゃぁ、ま。持っている痲臨を渡してもらう」

「はぁ！？そっちの方ができる訳ないだろう！」
まぁ、そうだろな。そんな風に思う穂琥。だが、こればっかりは薪も無理にでも奪い取らなければ問題があるのだろう。
「ん～・・・。無理にやりたいんだけどオレにはできねぇしなぁ」
薪はどこか遠くを見つめながら言った。それを聞いた男たちが怪訝な顔をした。
「何？戦えない？お前、療蔚か？」
「いや、戦鎖だ」
「ならなぜ・・・！？」
「戦うのが好みじゃねぇんでね」
少しだけ切ない表情をした薪を見て穂琥は少しだけ胸が苦しくなった。薪の言った『好みじゃねぇ』というのは単に好き嫌いの問題ではない。薪の過去にある強烈な打撃が薪をそうさせているのだろう。とはいっても、穂琥の中には完全な記憶が取り戻されているわけではないためになぜ薪がここまで苦しい思いをするのかまではわからない。
　そんなことより新単語。『療蔚』と『戦鎖』の二つ。これは眞匏祇を形成する二つの性質の話。人間でいうと、男と女、体育会系と勉学系とごく自然に二手に分かれるものと同じようなもの。眞匏祇ではこの二つの性質で容姿を左右される。厳密にはまだ解明されていない点が多々あるために語りきることはできないけれど、療蔚というものは一般に治療と言った人間でいう医者の部類になる。怪我をした者を治癒したり、保護したりする。逆に戦鎖は先陣を切って戦う存在。人間の部類で言うのは至極言い難いところもあるが、あえて言うのであれば軍人ということになる。戦うことに特化し、高い戦闘力をもっている。そして容姿だが、療蔚が桃色、戦鎖が青色と言った系統の毛色になる。とは言っても紫がかった者もいれば水色もいるし、赤もいる。薪は水色に近く、穂琥は桃色。そういったカラーを眞匏祇たちは受け持っている。
　白熱しかけているこちらの会話。痲臨を渡すようにと訴える薪に

対し、無論渡そうとするわけない男たちとの口論が続く。そんな中、男の中の一人が急に焦ったような表情で痲臨を仲間から奪い取ると薪の前におずおずとやってきた。
「あ、あの・・・これをお返し致します」
震える声で痲臨を薪に差し出す。ほかの男たちが怒号を上げる中、その男はひたすら薪の前で震えた手を差し出す。
「お返し致します、とは？」
薪のリピートに男は震えた声で続ける。
「どこかで見たことのある方だと思ったのです！」
その男の挙動と発言から薪を慤夸と気づいたのだろう。へぇと短く薪は言うと男はキュウと名乗った。
「キュウ？ゲルカン家の者だったのか？」
「はい」
キュウが名乗ったことで周りの男たちが怒りに沸いていた。
「お前！何を言っているのだ！せっかく手に入れた痲臨をみすみす渡してなるものか！」
「ふざけるな！この方に向かってそんな態度をとるなど言語道断だ！」
「兄に向いなんて口を利く！」
穂琥はこの発言で皆が兄弟なのだと悟った。そして兄弟げんかに発展してしまっているこの状況を肩をすくめて眺める。それしかできないからだ。
「はいはい、兄弟げんかは後に他者のいないところで。それにしても良洙（らず）がいないな？どこにいるんだ？」
その者をなぜ知っていると周りから言葉が覆いかぶさる。しかし薪は軽く知り合いだからと答える。キュウ以外の男たちはみな憤慨寸前まで来ていた。見かねた穂琥が薪に自己紹介するように勧めた。薪は少し悩んでいたが、ここが知り合いである『良洙』という男の家系であることをふまえて、名乗ることを決意したようだった。
「オレの名前は『シン＝フォア＝エンド』だ。よろしく！」

薪の言葉は至極軽い。しかしそれを聞いたゲルカン家の兄弟たちは顔面蒼白になり黙り込んでしまった。突然現れた慤夸に身も凍る思いをしているのだろう。それと同時にそれを認めたくなく、何とかして逃げ道を探っているところだろう。

「う、嘘だ・・・！あの方は今地球に！」

「帰ってきたんだよ、今さっきね」

薪のその言葉こそ、まるで嘘だと言わんばかりの表情をしている。薪を慤夸だと気付いているキュウも今の兄や弟たちの態度に焦りを覚えているようだった。そういった姿を見て薪は何とも切ない表情を浮かべるのだった。

「証拠は！慤夸だという証を見せろ！」

叫んだ男の声を得て、薪はそれを了承する。しかし、証と言っても何を証にすればいいのかわからない。

「何を証拠と提唱すればいい？」

薪の投げた質問に恐怖心で声が震えている男が必死で声を絞り出して言う。

「こ、慤夸（こっかもん）の・・・慤夸紋が在るはずだ・・・う、噂によれば・・・ぎ、毅邏（ぎら）の・・・呪印も・・・あるはずだ！！」

「リン兄様！何を！！」

「構わないよ。それが証となるなら見せてやる」

キュウの言葉を遮り、リンと呼ばれた男に向き直る。リンは震えている。

第七話　マリン

　慤夸紋は絶大なる力を有している。普通の眞匏祗が触れれば即座にその身を焼かれ魂石を砕かれてしまう。そんな恐ろしい紋章。慤夸としての証の紋章。それが慤夸紋。そして今の慤夸、つまり薪にはその慤夸紋と並んでもう一つの印が存在している。それが毅邏の呪印。この話は後に語るとして、薪にとっては忌々しい過去の遺物。それを見せれば慤夸であることを証明できるのなら見せるとしよう。
　左の腕、肩より少し下にそれは存在する。袖をまくってその証を皆に見せる。その直後にすさまじい眞稀が辺りを取り巻く。それによってただでさえ青白い顔だったのに、余計に青ざめ、もはや血の気を感じさせないくらいにまで青ざめてしまっていた。
「これじゃダメか？」
「い、いえ・・・ほ、本当に申し訳・・・ございませんでした・・・。数々のご無礼を・・・」
悲痛な表情で謝罪するリン。その他の男たちも震えながらに頭を下げる。
「わかればいいって！気にすんな」
軽い薪の発言にリンたちは恐怖の中に不思議そうな表情を入れる。
「と、なりますと・・・そちらの女性は・・・」
「穂琥様ですね」
この場にはいなかった声。後ろから聞こえた声だった。薪はくるりと振り返る。
「よう、久しぶりだな、良洙」
「お久しぶう御座います。相変わらず眞稀を振りまくのがお好きなようで？」
「ははは。言うな」
良洙の少しからかう様な言葉に感情無く笑った後にまずいことをしてしまった子供のように言う薪。それもそのはずだ。その隣であん

たも眞稀を振りまいているのではないか、と穂琥の訴える視線があったからだ。そんな穂琥の視線に良洙が気づくわけもなく良洙は不甲斐ない弟たちを睨む。

「なんと情けない！少しは頭を使え！薪様に対し何たる無礼を！」

黙る弟たちを目の前に良洙は困ったような表情を浮かべていた。

「いいって。そんなことより痲臨をよこしてもらいたいんだが」

良洙にそういった直後、室内の空気が変わった。まるで今それをここで言わないでほしいと言わんばかりに。その空気が指し示したのか、良洙の表情が怪訝なものとなる。

「ま、りん？」

「知っているだろう？」

「いいえ、知りませんでした。あれほど触れるなと言ったものに手を出したのか！」

兄の怒号に兄弟全員が身を縮めて謝罪の言葉を叫ぶ。怒りで言葉を震わせる良洙に薪は落ち着くようにという。薪の言葉を得て良洙は小さくため息をついて申し訳なさそうに顔をゆがませた。

「申し訳ありません。痲臨を誤った方法で使い、両親を失ってしまっているのです」

良洙は切なげに表情を落とした。薪はそれを得て相槌を打つ。痲臨とは強力な力を持つ不思議な玉。眞匏祇の有している魂石に近しいものではあるが、そのもの単体で比較した場合、はるかに痲臨の方が力を有している。それほどにまでに強力で且つ、危険なものである。そしてこの痲臨を正確に扱うことができるのは今では慤夸である薪くらいしか存在していない。

「これを、貴方様にお返しいたします」

良洙が本当に申し訳なさそうな表情をして痲臨を手渡してきた。薪は小さく謝礼の言葉を述べ、呆然としている穂琥に声をかけてその屋敷を後にした。

しばらくの沈黙が続いたのち、穂琥が先ほどの者たちは何であるかを尋ねてきた。

「ルヴィ＝ケルカン。昔オレが少し世話になった者だ。と言っても会ったのは良洙だけだがな」
「そっか・・・。で・・・あの、痲臨って・・・？」
穂琥の質問に対し、薪はあぁ、忘れていたと言わんばかりの顔をして少し面倒くさげに説明してくれた。
「大事なことだから覚えておけ。痲臨っていうのはいわゆる『願い玉』だよ。眞匏祇個々によって効力が様々に変化すると言われている。その使い方を知っているものはこの世界でもごく一部だ」
そう、ごく一部。何も知らぬものがそれに触れたところで何が起こるわけでもないただの綺麗なガラス玉に過ぎない。しかし、それを活用できる方法を知っていれば如何なることでもその痲臨によって願いをかなえることができるまさに究極の力。ただし、先ほどにも述べたようにその痲臨を『願い玉』として効力を発揮させることができるのは薪のみ。正しい使い方を知らぬ者はその痲臨によって使用者だけではなくその周囲のものまでも生命を吸い喰われる。ともかく。正しい使い方さえわかれば何でも手に入ると言っても過言ではない。
「といっても。オレは何でも手に入るなんて思ってはないな。夢や、愛や友情がそんな不安定で不確かなもののおかげで手に入ったところで本当にうれしいとは思えねぇな。まぁ、切っ掛け程度、で押さえておくべきだろうな」
「うん、そうだね」
どこかせつない顔をした薪に気を取られて曖昧な返事をした自覚を持った穂琥は薪のひらひらと風に舞う裾をつまむようにつかみすたすた歩いて行ってしまう薪の後を追った。
　広大な土地を歩き続け、再び崖のような、丘上のようなところに出る。そしてその先に見えるのが。
「ご到着だ」
「うっわぁ！大きい！ここが・・・薪と私たちが住んでいた場所・・・」

目の前に広がる巨大な建物。荘厳な空気を漂わせているその『城』に穂琥は見とれ言葉を失った。薪の目はどこか冷たかったが、穂琥にとっては初めて見る『我が家』と城に感激していてそれどころではなかった。そしてその城の袖、丘の下には広がる街々。城下街だ。賑わう眞匏祇たちの様子が米粒のように見える。

「嫌な思い出が出てくるなぁ～」

ぼそっと言った薪の言葉を聞き、穂琥は一瞬どうしたものか悩んだが、ニコリと笑って答える。

「昔は昔。今は今。ね？」

「まぁな」

遠い過去に思いを馳せるように薪は瞳を閉じる。

第八話　アラシ

穂琥の腹部に痛みが走ったのはその直後だった。薪が穂琥の腹を抑えて横に倒したのが倒れてから理解した。
「な、何！？」
倒れた穂琥を庇うように薪が立ちはだかる。何が起きたのか全く理解ができない。
「よく防げたな・・・。性懲りもなくきやがって！」
低い女性の声。荒れたその声に薪は軽く答える。
「知らんよ。オレとお前さんは初対面だぞ？いきなり攻撃を・・・うわっ！」
「うるさい、黙れ！」
その女性は薪に向かい刃を振るう。薪が怒夸を継承してからは随分と変わったが、このように怒夸に対して刃を向けることは無論してはならないこと。昔の政治であったのなら、この女性の命は・・・。
「はいはい、ストップ！とりあえず落ち着いてな。何があったのか訳を・・・」
「黙れ！この下種が！」
女性の暴言に穂琥は少し遠い目をする。
―あぁ、この女性は薪を『薪』と知った時、どんなに悔いるだろうか・・・・
「名前をプラカードにして首から下げておくか」
「うん。私はその方がいいと思う。特にあんたは。周りの方のためにもいいと思うよ」
女性は相変わらず剣を構え、薪に攻撃の一手を加えようとしている。薪相手にそんな真っ向からの攻撃が効くはずもない。もっと強ければ別だが。
「村を壊しているのは貴様らだろう！」
「は？オレらは村荒らしじゃないって・・・って、おい！？聞こう

！？オレの話、聞いてね！？」
薪は女性の剣をかわしながら困った表情で叫ぶ。そんな薪を見て、さすがにこのままでは色々支障をきたすと判断した穂琥は仕方なしに薪に手を引くように交渉を持ちかけることにした。
「ちょっと！もうやめなって！諦めようよ。退散するべきだよ、薪！」
そう叫んで、止まったのは薪の方ではなく女性の方だった。そしてその理由を一瞬だけ考えて、理解したと同時に薪に土下座する思いで謝罪の言葉を叫ぶ。
「ごごご、ごめんなさい！！不用意に！！本当に！あの・・・！」
必死で謝る穂琥にこれまでにないくらい冷たい視線が送られる。慤夸である薪の容姿はあまり世間に伝わっていないが、名前はしっかりと通っている。それ故に一般の眞匏祇を前に薪はあまり名乗ることをしない。先ほどの屋敷で名乗った理由は良洙の家系であるということを理解した上だ。故に今不用意に穂琥が名を呼んだせいでつい表情で穂琥を睨んでいるのだった。
「シン・・・サマ・・・？」
震える女性の声で薪はその女性に向き直る。剣が小刻みに揺れ、悲しい金属音を響かせている。薪はそれを見ていまだに『こちら側』は前代慤夸の圧力が残っていることを痛感する。
「い、今でのご無礼をお許しくださいませ！どうか、どうか・・・・首をはねないでください！」
悲痛の叫びを女性は上げる。薪はそれを何とも言えない苦しい表情で返す。穂琥はその女性の叫んだことがあまりにも衝撃的で言葉を失っていた。
「んな危ねぇことしねぇよ。オレは今までの慤夸とは違う」
女性は涙を目に貯めて必死で謝礼を述べる。穂琥は薪にそっと尋ねる。首をはねるとは一体何事かと。
　前代慤夸、つまりは薪の父にあたる存在。それは至極冷徹な存在だった。前慤夸は違反、無礼を働いた者の首をいともたやすく撃ち

落とした。そしてそのまま。
「そのまま？」
「いや、なんでもない。さて。村荒らしがいるのか？」
薪は話を強制的に区切って女性の方に言葉をかけていた。前慤夸がそうして行ってきた強烈な圧力制度は未だにこの地に根付いている。もうすでに何年も前に慤夸が変わったというのに今の慤夸つまり薪の思考が根付いていないという悲しい現状がこれだ。そんな切ない感情を持ちつつも徐々に変わってきているこの世界を見ていつかの平和を願う。
　そして今は村荒らしだ。
「はい。半年ほど、前からです」
薪の質問に女性は答える。半年もの間、狩られる側として生活していれば確かに見慣れぬ怪しげな者たちがいれば斬り掛かってしまいたくなる衝動がわからないでもないかもしれない。きっとそれを疑心暗鬼というのだろう。
「村まで案内してもらえるか？潰してやるよ」
軽く言った薪の言葉に女性は目玉が落ちるほど目を見開いて否定を入れた。薪、つまり慤夸の手を煩わせるわけにはいかないと必死になって首を振る。しかし薪はそんな女性の気遣いもなしに半年も苦しんでいるという事実を叩きつけ、女性も言葉を失っていた。
「じゃぁ決定。穂琥、行くぞ」
薪にそう言われ穂琥は返事をする。悪党退治という訳だ。村に向かっている途中で女性の名がネムということを知った。
　村に着くと眞匏祇たちが集まってきた。そしてネムの連れている薪と穂琥を見て怪訝そうな顔をしていた。
「捕まえた・・・訳ではなさそうだな？　この方たちは？」
男が疑問そうな声を上げた。慤夸であることをたやすく言ってよいものではないということをネムも承知しているために下手に言葉を続ける訳にはいかず黙ってしまった。その沈黙を一瞬のものとするように薪が村荒らしを潰しに来たと宣言した。一同みな驚いたよう

だったが少し喜びの気配を見せたので穂琥は少し安心した。疑われていてもおかしくないのだから。
　村荒らしは夜に出るとのことなので村の使われていない家屋を一つ借りてそこで腰を落ち着けた。
「狭いところで申し訳ありません。ではごゆるりと」
ネムは頭を下げて退室した。
「村荒らし、夜だってねぇ。それまで暇だなぁ」
「出るといいけどな」
「え？」
意味深な発言をした薪に追及を求めたが薪は不敵な笑みを浮かべてそれ以上は言ってくれなった。疑問で首をかしげるも薪は何も言わずにネムの用意してくれた食事にありついていた。
　随分と夜が更けてきたころ。薪は小さな声で穂琥を起こす。寝ぼけている穂琥が妙な声を出さないように警戒しながら。
「フエ？」
案の定変な声は出たが制裁を加えるほど大きくなかったので無視することにした。
「お出ましだよ」
「・・・・・・・・。あぁ！」
長い思考の末、自分たちが何を待っていたのかをやっと理解して起き上がる。そしてそのままそっと外に出て辺りを確認する。
「あそこだな」
薪の発言に穂琥は硬直する。一体この暗闇で薪は何を見ているのだろうか？何も見えないって。明かりを用意しろと言いたいくらいだった。それでも近くにいる薪の表情はものすごくあきれている中に軽蔑の表情を浮かべているとわかる。
「お前、城に着いたらオレが特訓してやるよ」
「ご、御勘弁を。それで？どこに？」
わずかながらの月明りで建物や木々の影はとらえることができる。そしてその中の一本の木を指差して薪はそこにいると穂琥に伝えた。

踏み込んでさっと移動する。警戒しているはずの村荒らしの後ろを意図も容易くとる。それができるのは上級の証拠。
「こんな所で何をしている？」
「村荒らしさん！」
薪と穂琥に後ろを取られて慌てふためく村荒らし。逃げようとしたその村荒らしを薪は素早くつかめて後ろ手に捉える。眞稀で村荒らしの手を縛るとその場に座らせる。それを解こうと必死にもがくが、外れる様子は全くない。
「オレの眞稀はそんなに簡単に壊れないよ」
薪が言い放つと村荒らしはどこか諦めたようにおとなしくなった。
捕まえたという報告を得て村の者たちが次々に集まってきた。あたりには灯がともり明るく見渡せる程度にまでなっていた。ネムも血相を変えて走ってきた。
「スイギさんがいらっしゃらなくて・・・！」
「この村荒らしがそれだ」
薪が首根っこを掴んでその村荒らしをグイと前に押し出す。悔しそうに顔を歪めたスイギという男の顔が明かりに照らされる。村の者たちは絶句していた。そのままスイギを手放すと薪はネムに目で軽く合図を送ってから踵を返して歩き始めた。
「あ、お、お待ちを！」
村の誰かが叫んだがそれに呼び止められる訳もなく、薪と穂琥はさっさと歩き去ってしまった。のちにその村はネムを長として立派に繁栄したと報告が入るのだった。

第九話　キオク

先ほどから長い雄叫びが聞こえている。さすがにそれに飽きてきた薪はくだらないといった表情で舌打ちをする。そして薪は何の問題もなく地面へ着地する。が、隣の阿呆は見事にドスンと鈍い音を立てて着地した。

「何よこの崖！」

「崖にキレるな！」

穂琥としては歩いていたら突然地面が消えて落下したと思ったらしいが、薪としては普通に過去に崩れたために地面がなくなっていただけのことで突然消えたわけではないということ。ギャーギャーと文句を言っている間にふと、周りに眞匏祇が集まってきていることに気づいて少しだけぞっとした。先ほどのように攻撃対象になってしまうとしたらさすがの薪もこの数を相手に相手を無傷で対応することは難しいだろう。しかしそんな心配をよそに、周りの反応は至って平和だった。

「薪様！？すごいよ！」

「わぁ！生で見ちゃった！」

「薪様お帰りになられたのね！」

「後ろのいる方は穂琥様か？」

「美しい方だなぁ～」

聞こえてくる言葉はどれも平和な感じ。穂琥としては嬉しいことではあるがやはりよくわからない。この崖の向こうとこっちでは世界がまるで違うように思えた。慤夸に対することも無論そうだが、何より薪の顔を皆が知っているということも疑問対象の一つだ。それを薪に尋ねたが面倒なのか教えてくれなかった。

「教えてよ！教えてくれないと読者もわからないでしょ！」

「は・・・？何言って・・・」

困惑する薪だが結局後で教えるということになり、群衆が二つに分

かれて作った身を通って城へと向かった。
　城の中はたくさんの眞匏祇で埋め尽くされていた。やっと帰ってきた慤夸に皆は歓喜に包まれていた。確かに、社長のいない会社が長いこと持つとも思えにくい。そういった状況下でこの城に努める眞匏祇たちは頑張ってくれていたのだ。そんな眞匏祇たちに薪は謝礼の言葉を述べながら進んでいく。
「部屋に案内するよ」
混雑しているようなその中を薪は何も苦労することなく、またまた疑問な顔をするわけもなく進む。穂琥としてはこの数の軽く圧倒されていた。こんなに集られたことはなかった。薪は子供のころよく城を抜け出していた記憶がちらりちらりと存在するがこの数の眞匏祇がいる中をすり抜けて抜け出していたと考えるとすさまじいものを感じた。
　とある部屋に案内されて入る。広い素敵な部屋。ここが慤夸の娘の部屋。では、息子の部屋は？当然見てみたいものだ。
「お前は馬鹿か。今や『慤夸の息子』なんて存在していないんだよ。オレが慤夸だ」
「あ・・・・」
「オレの部屋は慤夸の居座る部屋ってわけだ」
薪はさっさと踵を返して部屋を出る。それにならって穂琥も後を追う。
　さすが慤夸の部屋。広いだけではなく膨大な資料の山に囲まれている。ただ山に囲まれていると言ってもそれを管理しているのが薪である以上、それらの整理整頓ぶりは半端ない。やはり慤夸としての仕事をこなすべく場所らしく、そこの部屋は生活感が全くなく、質素な机がある程度だった。語弊があるかもしれないので訂正を入れるが、質素と言っても一般の者から見た十分豪華なものであることに変わりはない。そしてその奥の扉が薪の生活空間となるらしい。そこを覗かせてもらうと薪らしい空気を漂わせている部屋がある。綺麗にまとまりのある部屋。シンプルで必要最低限のものしか置い

ていない感じだった。
「ここがまぁ、オレの今の部屋だ。ガキの頃の部屋は何になっていたかな？忘れた。物置か。もっともあまり使っていなかったけどな」
「え？子供の時でしょう？部屋を使っていないって？」
「別の場所にいた」
薪は再び踵を返して歩く。穂琥もそれに倣う。そして次についたのは薄気味悪く湿った地下室。薪が慤夸になってからはほとんど封鎖されてしまっているため全く使われていない。
「かび臭い・・・。嫌な雰囲気だね・・・」
「そうか？オレは慣れているけど」
普通にそう言って退けた薪を恐ろしいと感じたのはきっと穂琥だけではないはずだ。そして薪はその奥にある不気味な部屋を指差してここ、と短く言った。
「え？何が？」
「オレがガキの頃いた部屋」
この地下室に穂琥の声が木霊したことは言うまでもないだろう。
　こんな不気味な部屋に薪は生きていることができるかどうかを調べるために入れられていた。父の力を受け継ぎそれを己の物とする。それを行った後にここへ叩き込まれたのだ。
「2歳の時だったな。あの時は死ぬかと思ったよ」
「え？何それ」
「・・・・あれ？話していなかったっけ？」
「うん・・・」
薪にしては珍しくボケたような空気を出していた。
「私、それ覚えていないんだけど・・・」
「まぁ、オレが消した記憶の一部だからな」
穂琥の消えた記憶。実際はこちらの眞匏祇の世界から人間の世界に送る際に、薪が不安定だったことも影響してそれの反動として穂琥の記憶が飛んでしまっているのだが、そうではなくて薪の意思によって消されている部分が穂琥の記憶の中には存在していた。

「オレ自身、覚悟着いたらいうつもりだったんだよ。このことはもう話しているつもりだった」
珍しい薪のそのセリフに戸惑いを覚えながら穂琥は薪の話を聞く。
薪はまず自分たちの出生について語りだした。

第十話　ウマレ

眞匏祇というのは人間と生体が全く異なっているということはいい加減理解してもらえていると思う。人間と眞匏祇は生まれる前からすでに大きく異なることがある。それが母体の中に留まる月日の問題。人間は十月十日と言われている。眞匏祇の場合、その母体の中に2年もの間眠ることになる。

時を遡って。今よりはるか昔、地球ができるよりもずっと前。眞匏祇の世界は存在していた。そんな気の遠くなるようなずっとずっと昔の話。眞匏祇の世界は始まっていた。そうして始まった時代の中で驚くべき変化があった。地球がやっと形を成し始めたころだ。慤夸のところに男の子が生まれた。その男の子の名前は戯是（ぎぜ）といい、彼は生まれてから泣くことはなかった。泣く必要がなかった。ごく自然に呼吸をし、目を開け。そして言葉を話した。

「初めまして、母上」

戯是は最初にそう言った。当時はかなり驚いたことだが、次第に慣れ、そういったことが起こるのだと認識された。そして戯是の素晴らしい成長を喜んだ。それから何十年、何百年、何千年と時を経て、再びそれは起きたのだった。

真っ暗い中をぽっかりと浮いていることに気づいたのはいつのことだろうか。はっきりとしない意識の中で声を聞いた。優しく語りかける声を。

「あら、今動きましたよ」

「ほう。わたしに相応しい子が生まれることを期待しているよ」

「そうですね」

そんな声を聞いて色々拙い思考を駆使してやっと自分が今、母体の中にいることを理解した。これから『自分』が生まれるのだと。そしてその声の主が父と母であることも理解した。

それともう一つ。こうして母体の中にいるのはわかるが、体を少し動かしてみると母体とは別の何かがあることに気づく。そして、両親の会話と己の与えられし知識を以てそれが双子の相方であることを認識した。そして。そんな風に思考を繰り返しながら育っていくこと2年。ついに生まれる時が来るのだった。

生まれたのは自分と妹だった。しかし妹は至極衰弱し、危険な状態に陥っていた。療蔚が蘇生術を行おうとしたが、何故慤夸の血肉の欠片。眞稀が押し負けてしまって療蔚は後ろにつんのめってしまった。それを目にして我が妹へと手を伸ばす。そっと弱る妹に触れる。すると想像を絶する眞稀が辺りを包み込んだ。膨れ上がった眞稀が治まったころには女の子の鳴く声が響き渡り、もう一人は気を失っていた。

目が覚めたのはどこかのベッド。おそらく乳児育成室のようなところだろう。気配を頭の上に感じ体を起こす。

「目が覚めたか」

「はい」

目の前にいたのは鋭い目をした己の父でもある慤夸だった。返事をしたことに慤夸は嬉しそうに顔を歪めた。

「口が利けるとは素晴らしいな。お前のようなものを『思持』（しじ）というらしい。古い文献に出ていたよ。あぁ、わたしの名はタギ＝フォア＝エンドだ。そしてお前はわたしの名を継いでシン＝フォア＝エンドだ」

「わかりました。宜しくお願い致します」

「お前の妹はホクだ」

冷たい目をしているこの慤夸にシンはひどく嫌な予感を覚えた。タギはそのまま歩き去って行った。それからまたぼうっとしていると視線を感じ頭を上げる。するとそこにいたのは目元を優しく和ませた美しい女性がいた。

「母上、ですね？」

「頭のいい子。わたくしはシホ＝スィンス＝トゥウェルブと言いま

す。あなたは？」
鈴を転がしたような静かでなめらかな声。それを耳に残しつつ、シンは己の名を母であるシホなら知っているはずだというとシホは穏やかな声で言う。
「えぇ。存じ上げています。しかし、初めて会った者同士、名乗るのは常識でありましょう」
美しいその指をそっと伸ばしてシンのほほに触れる。その暖かさをシンは温もりと呼ぶのだと悟る。そして先ほどの父、慤夸とはまた別の意味ですごい力を持っているのだということも。
「申し訳ありませんでした。名はシン＝フォア＝エンドです」
「ありがとう。宜しくお願いします」
「こちらこそ」
今すぐには無理だが、妹ホクとも時期に居合わせるとシホは言った。それを聞いてホクの名前はホク＝スィンス＝トゥウェルブであるのか尋ね、それに是と答えたシホに何故名字が変わるのかを尋ねるとシホは少し驚いていた。
「知らずして穂琥がスィンス＝トゥウェルブだと？」
「父上が名を全て言いませんでした。なので」
あくまで憶測で言っただけのこと。しかしそれは合っていたらしい。
「薪。あなたは凄いわ」
微笑む母に少しだけ照れを感じていた。
「双子で性別が異なる場合、男が父親、女が母親の名を譲り受けることになるのよ。だから薪は巧伎のを、穂琥は私のを受けているのよ」
「はい。理解致しました」
名前のことはわかったが、薪はさらに浮かんだ疑問を母に投げかける。
「父上は『シン、ホク』と呼びますが、なぜ母上は『薪、穂琥』とお呼びになられるのですか？」
「そちらの方が暖かく思えません？」

母のその思考に薪はとらわれる。その暖かい響きが薪も好きだった。
「はい。その方がいいです」
「よかったわ。同じ意見の者がいて。わたくしは紫火、あの方を巧伎というのよ」
優しく紫火は伝えた。その笑みに何とも言えぬ悲しさが垣間見えた気がしたのは薪の気のせいか。そして紫火はもう眠るように薪に言う。薪はそれを受けて眠ることにした。母体の中とは違って激しく体力を消耗する。今までは母に生かされてきたのだが、これが自分の力で生きるということなのだろうと実感するのだった。
　それから数日後、薪たちは退院した。そしてそこで初めて実の妹、穂琥との対面となった。まだ言葉を話すことのできない穂琥はとても無垢な目で薪を見つめる。あう～と何を言っているのかよくわからない言葉で薪へ手を伸ばす。それを掴もうと手を伸ばそうとしたとき、巧伎の声が聞こえて手を止めた。鋭く光るその眼が薪は嫌いだった。すべてを征しようとしているその眼が。
「お前は生まれてすぐに言葉を使い、眞稀を使い、己の妹を治癒させた。だが、粋がるなよ？その程度でこの世界を生きていけると思うなよ」
冷たい言葉が頭の上から落ちてくる。それが苦しくて重たかった。しかし、今の薪にこの巧伎に対抗できる力など有してはいなかった。薪はただ是と答え、従うことしかできなかった。
　ここまでが薪たちの生まれたばかりの話。そしてこれから話をするのが、本題。薪が2歳になった時の話。
　巧伎は薪を前に自分の後継として慤夸の座に就くことを薪に伝えていた。しかし薪はそれを断固として拒否していた。しかしその拒否を許すほど薪の父は甘くなかった。
　生まれて丁度2年が経った日のことだった。部屋に巧伎の命令で役夸（やっか）が入ってきた。役夸とは慤夸の周りで仕事をしている者たちのこと。他にも長夸（ちょうか）と呼ばれる者たちも存在する。役夸よりも上役の仕事の者たちだ。

役夸は巧伎の命令とあって半ば人形、機械のように薪を捉えてとある場所へと連れて行く。

「こ、刻紋・・・」

刻紋(こくもん)の間。字のごとく、紋章を刻むべく場所。今の状況で刻むのは無論、薪の体のどこかということになる。つまり、この刻紋の間で慤夸としての資格を得るための慤夸紋を刻むということだ。それが体のどこか一部に刻まれていることでその者が慤夸であるという証明になる。

「離せ！離せ！！慤夸になんかなるか！」

刻紋の間には中央に気味の悪い寝台の様なものが存在し、いくつもの溝が見受けられる。そしてその溝は床まで続き、しまいには部屋中に蜘蛛の巣のように張り巡らされている。そしてその寝台のようなところに薄気味悪い笑みを浮かべた巧伎が寄りかかっていた。

「父上・・・」

その笑みを見たとき、薪の中に理解しようのない恐怖を感じさせた。役夸によって台に乗せられた薪はそのまま巧伎へ主導権を変え、上着を無理に脱がされる。そして巧伎は小刀のようなものを取り出して薪の腕に突き刺した。

役夸たちは震えながら薪の絶叫を聞いていた。本来ならばこんなことをしたくはない。しかし、慤夸である巧伎の命令とあっては己の命が危ない。家族が危ない。何も抵抗することが出来なかった。小刀で薪の腕に慤夸紋を刻んでいく。腕からは血が流れ、ダイにほられている溝へ流れていく。そしてその溝を伝って薪の血は部屋中へ満ちていく。すべての溝が薪の血で埋まった時、床が緑色の光を放つ。それを確認した巧伎は愉しそうに笑う。これで慤夸紋を刻む儀式は終了ということだ。薪の腕にはくっきりと慤夸紋が刻み込まれていた。

ただ、2歳などと子供、とも呼べないくらい幼い体に慤夸紋を刻むことがどれほど苦痛なことか。ただ、小刀で体を傷つけられた痛みではない。慤夸紋を刻んだその刀にも力が宿っている。その宿す

力が慤夸として相応しいかを試してくる。その苦痛はおそらく想像を絶するものとなるはずだ。そんな痛みを薪は受け、もはや瀕死の状態になりかけていた。にもかかわらず、巧伎はそのまま地下へ薪を連れて行くよう役夸に命ずる。役夸はただ恐怖からそれに従うだけだった。

そうして入れられたのがあの冷たく凍る不気味な地下室という訳だった。

第十一話　オハカ

薪はこんなわけだ、と話を終わらせた。
「それからオレは穂琥のおかげで3か月後には出ることができたんだがな」
薪は一か月ほどで肉体の方は完全に正常化していた。ただ、精神の方はまだ正常とは言いにくいものだったが。通常、慤夸紋を刻まれれば、『試す』という力によって4か月ほどは生死の境を彷徨い苦痛な思いをするらしい。しかし、薪は一か月ほどで通常の状態になってしまった。そのことを、巧伎が恐れなかったわけがない。予想以上に薪が力を有していることに気づいたからだ。いつ、反発し逆らってくるかわかったものではないのだから。
「まぁ、そんなわけだ。これで2歳までのは話した。だけどまだ少し、残っているんだよ」
「え？」
「3歳の時の話だ。でも、これは言えない。まだ、それを語るほどの勇気がオレにはない。だから、待っていて欲しいんだ・・・。オレの、勇気が出るまで」
薪の向けてきたその瞳に穂琥は負けた。だからただわかったと伝えた。ありがとう、と短く伝えた薪の表情。その表情に穂琥の胸は苦しく締め付けられた。おそらくこれを胸騒ぎというのだろう。聞いてはいけない気がした。薪のことがわかってしまいそうで。薪の心がわかってしまいそうで。その苦しみを知ってしまうことが怖かった。
　重たい空気が流れて穂琥は何とかして話題を変えたかった。きっと薪も、無理やり話題を変えることに抵抗はないはず。そこで穂琥は珍しく頭をフル回転させる。そして思い出した一つの疑問事項を薪に叩きつけることにした。
「ねぇ薪！ところでさ！丘の向こうとこっちでどう違うの！？」

唐突にしてきた穂琥の質問に、一瞬ついて来られていないような表情をした薪だったがいつもの柔らかい表情に戻って薪は頷いた。
「わかった。説明するよ。移動しながらでもいいだろう？今から痲臨をしまいに行きたいからさ」
「もちろん！」
いつもの表情に戻ったことが穂琥には嬉しかった。薪は何かとすべて自分で背負い込むところがある。それが悪いとは言わない。背負わせているという自覚がるから。でも、そのせいでいつか戻ってこられないくらい暗い世界に行ってしまったらと、先ほど話を聞いて思ったのだ。
　歩きながら薪は説明を始めた。
「向こうとこっちでは情報の伝達具合が全く異なっているんだよ」
崖のように削られてしまっているあそこのところが境界線のようになっていて住む世界を分けてしまっているのだった。それは薪の計らいではなく、昔からの伝統的なことのようになってしまっている。今、慤夸となって力を蓄えてきた薪はそろそろその境界線を取っ払ってしまおうと考えているらしい。そしてその境界線のせいで情報が伝達されにくく、名前は知られていても顔までは届かない。故に、今回の慤夸がどんな眞匏祇かも、丘の向こうの連中には知るすべもなかった。故に過去の記憶で存在している巧伎時代の慤夸を連想し、薪に対してあれほどまでに恐怖していることになっているのだった。
「そっか。だからあっちの人たちは知らないんだ・・・」
「やめろよ、それ」
「え？」
突然薪が何かを制止した。穂琥には何のことかさっぱりわからない。理解しかねている穂琥のために薪は説明をする。
「眞匏祇は眞匏祇、人は人だ。違う生き物なんだよ。眞匏祇の奴らは大抵人間を好いていない。間違っても眞匏祇の前で『人』という表現は使うなよ」
「あ、うん。そうだったね、ごめん。薪は・・・嫌い？」

「は？」
「今まで・・・地球に居て」
穂琥の質問に薪は少しだけ不思議そうな顔をした。
「オレは嫌いじゃないよ」
「わぁ！よかったぁ！嫌いだったらどうしようかと思っちゃった！」
「当たり前だろう。人間とて眞匏祇と同じさ。いい奴もいれば悪いやつもいる。それだけのことさ」
性質よりも本質を見ようとする薪ならそういう答えが出て当然だった。少しでも疑いを持った自分が恥ずかしくなった穂琥だった。
　そうして話をしている間に痲臨をしまう部屋まで到達した。部屋は2畳程度の小さな部屋だった。博物館の展示場にありそうなケースがあり、その中には先ほど受け取った痲臨と似たようなものが3個置いてあった。そのケースの中に先ほど入手してきた痲臨を収納した。この世界にはまだまだ痲臨が存在している。それを全て回収することも薪の慤夸としての役割でもあった。
「さてと。これでひと段落だな。挨拶に行くか」
「え？」
「着いてこい」
薪に誘われるままに城の外に出る。外、と言っても城の敷地内だが。そうして進んでいくと綺麗な広場に着く。広場の中心には豪華な花々で飾られている小さな塔のようなものがあった。大きさにして穂琥の腰くらいの高さだ。その隣にはそれよりも少し低い同じようなものがある。そして薪はその二つ並んでいる塔の前に跪いた。
「ただ今戻りました。無事にホクも連れてまいりました」
目を軽く伏せて薪は言う。穂琥は自分を『ホク』と言った薪に一瞬驚いたが、ここがいったいどういう所なのかをそれで察して理解した。
　ここは墓だ。己の父と母の墓。当の昔になくなっているお二方を祀る場所。大方、大きい方が父、慤夸の物で少し小さい方が母の方だと穂琥は思う。そして穂琥も薪の隣に跪いて記憶にはあまり残っ

ていない父と母へ言葉を送る。
―ただいま帰りました。失礼ながら私には記憶があまり残っていません。ですが、お二方は決して忘れていません。帰ってきて早々ですがお願いがございます。もし、出来たなら・・・どうか薪を開放してください
心の底からそれを願う。薪は未だに『慤夸』ということに縛られている。無論、慤夸であることから解放してほしい訳では無い。薪という慤夸が居なくなってしまってはこの眞匏祇の世界は壊れてしまう。そうではない。薪はもっと別の物に縛られている。これはあくまで穂琥の勘だが、父である巧伎に薪は身動きが出来なくなるほど縛り付けられているのではないかと。穂琥はそっと目を開ける。だからお願いいたしますと。薪はもっと自由に翼を広げるべきなのだと。
　終わったと立ち上がった穂琥に薪は了解したが帰ろうとはせず、二方の墓の後ろに立ってその向こうに向かって『帰ったよ』と言ってから広場の出口へ向かった。何故薪がそうしたのか気になり、薪がそういった方向に目を向けた。穂琥は一瞬、自分の目を疑った。そこには数えるだけで一日が終わってしまいそうなほどの墓が存在していた。今までこの城で使えていた者たちの墓かと一度思ったが、仕えていた者たちでも家族の元に帰るからここで供養し墓地を立てるのはどこかおかしい。ならばもっと別の理由だ。
「ねぇ。あのお墓は・・・」
「いずれ話すよ」
薪はどこか素っ気なく答えてさっさと歩いてしまう。穂琥は首をかしげて薪の後を追う。

第十二話　ケンギ

それから部屋に戻るかと思ったら全く別の場所へ連れてこられた。２０畳ほどの何もない部屋。

「ここはオレがガキの頃に修行していた場所だよ」

父がここで薪を鍛えた。とはいっても巧伎はあまり薪に教えることはなかった。まだまだ生まれたばかりの子供で１年やそっとのぐらいで細かいところまで教える気はなかったようだ。簡単に言えば甘く見ていた、と言ったところだ。故に今薪が覚えている技などの数々は独学がほとんどだった。

「よし、穂琥。そこに立て。ほら、いいから立って」

突然のことに意味が理解できなくて抵抗しようとしている穂琥に薪は無理やり指示した場所に立たせる。仕方なくそれに従ってみると、突然薪が剣を出したことに気づく。それにものすごく嫌な予感がして穂琥は足を一歩下げる。

「どぅわぁぁぁぁあああ！？」

予想通り薪はその剣で穂琥に斬り掛かってくる。それに驚いてかなりひどい声が漏れた。それから何度か薪は剣を振るう。穂琥はそれを何とかしてよける。よけなければ当たるが、よければ問題ない。薪の方も手加減はしていることが理解できる。が、いったい薪がどういった理由でこんなことをしているのかわからなかった。

眞匏祇は確かに人で言う魔法のような力を有している。しかし、だからと言ってその魔法のようなものをぶつけ合って戦う訳では無い。いや、厳密にはそれだけでは戦わないということ。主に使うものは武器。大抵は剣が多い。その剣も持ち主によってさまざまな形をしている。その剣に己の眞稀を練りこんで強靭なものにして戦う。

息を荒げて穂琥は薪の刃から逃げていた。

「まぁ、こんなもんか」

激しく息を切らす穂琥の反面、全く息を切らしていない薪。まぁ、

これは鍛えている薪相手だから当然かとため息をつく。
「お前はな、眞匏祇として生きていく資格が本当にない！人間すぎる」
薪に言われてはっとした。ネムという女の子がいた村で薪が特訓すると言ったことを思い出した。
「てっきり冗談かと・・・」
「オレも最初は冗談のつもりだったけどあまりのお前の危険性に危機感を覚えた。嫌か？」
薪はにやりと笑って穂琥に言う。例えここで穂琥が嫌だと全力で拒否しても強制的に行使するつもりだった。
「ううん！薪に特訓してもらえるなんて最高だよ！」
予想に反した穂琥の発言に薪は驚いた。てっきり嫌がるかと思っていたから。まぁ、やる気があるのは悪いことではない。薪は小さく微笑んで剣を鞘に納める。穂琥の基礎体力がどのくらいかは理解したからだ。
「問題は中だな」
「中？それは無理でしょ！性格なんて言うものはそう簡単に修正できないよ！　あいだっ！」
薪からの空手チョップを喰らって頭に激痛が走る。その頭を押さえて薪に文句を叫ぶが、薪は冷たい目を穂琥にそそぐ。
「あのな。中っていうのは眞稀のことだ。ま～き。わかるかぁ？」
「あ・・・そうっか！」
この穂琥の天然っぷりはいったい誰に似たのだろうか。
とにかく今からは眞稀を向上させるための特訓をすることになった。感知能力も低い穂琥にとって眞稀を向上させればおのずと感知能力も上がってくる。そういうことで特訓が始まった。
何回もうだめですと言ったかは数えていない。そのくらい言ってやっと薪はやめてくれた。
「まぁ、こんな程度か。しょぼいなぁ。そんなに息が切れるほどやってないのに」

息をぜーぜーとしている穂琥に薪は冷たく言い放つ。穂琥は息が切れながらも薪への対抗は忘れない。
「ご、ごじ、かんが、そんなに、ってレベル！？」
「オレはな」
あっさりという薪に穂琥は叫び声を上げる。
「あんたを基準にしたら世界が破滅に向かうわ！」
「よし、息切れ治ったみたいだから次のステップ行くぞ」
「鬼！」
休憩時間なんてほとんどなく薪との特訓の時間は過ぎて行った。

第十三話　ヌスミ

やっとのことで薪の出した課題を習得し終え、休憩の時間を設けてもらった。そうして休息していると役夸が部屋に飛び込んできた。
「し、薪様！侵入者が・・・！」
慌てふためいたその様子を見て薪はため息をついた。
「何もそこまで慌てなくても。おい、穂琥。修行の成果見せてみろ」
「い、いきなり！？今習得したばかりだよ？！」
「うるせー。修得したものは即座に使えなくちゃ意味がねぇんだよ」
穂琥は薪ほど飲み込みが早いわけじゃないと文句を言っていたがそれすらも強引に押し切り、とにかくやれと命じた。
穂琥は意識を集中させて眞稀を練り上げる。そしてその侵入者の気配、つまりその者の持つ眞稀を探した。よほどレベルが高くない限り絶対に眞稀は体外に漏れる。完全に眞稀を消すことができるのは穂琥が知る限りでは薪のみ。薪はほかにもいると言っていたが。
「・・・わからない・・・」
「これだけ時間かけてそれかよ」
「仕方ないでしょ！それに時間かけてって言うけどね！まだ数十秒しか経ってないんだから！」
「はいはい。キミ、西調（せいちょう）の前を移動中だ。今行けば間に合う」
「はっ！了承いたしました！」
役夸は薪の言葉を聞くと同時に部屋を飛び出していった。穂琥はさっすが薪、と感激している。それに呆れてため息をつきながらも薪は侵入者に会いに行くと言って部屋を出る。それを聞いて穂琥は薪の強さを痛感する。普通、侵入者だったら捕まえに行く、とかになるだろうに、薪は会いに行くという。単なる力の強さだけではない、心も強い証拠だろう。
薪の後について侵入者がいるであろう場所へ移動する。薪的にはきっとそんなに速いスピードではないのだろうけれど穂琥にとって

はかなりの速さでついていくのに結構大変な思いをした。
　薪と穂琥がその場に着いた頃にはすでに侵入者らしき男が捕まっていた。そしてその手前に腕を抑えた役夸がいた。
「どうした？」
「いえ、少し奴の攻撃を受けてしまっただけで・・・大したことはありま・・あ・・・」
薪は役夸の言葉を無視して役夸の腕の怪我を治す。
「無茶は禁物だ。怪我はすぐに治さないと」
「申し訳ありません」
役夸は頭を軽く下げる。そして薪は侵入者へ向き直る。
「さて。お前は諜者か？それともただの迷子か？」
薪の言葉に侵入者は嘲笑うように鼻を鳴らした。
「慤夸も、落ちぶれたもんだな！」
ただその声のトーンはどこか震えていた。その理由は天下の慤夸を前にしているからだろう。そう考えるとおそらくこの嘲笑も半ば開き直りと言ったところだろう。
「薪様に対しなんという口のきき方を！」
「構わないよ」
役夸が男に怒りの声を上げたが薪はそれを宥める様に手を上げて言った。
「侵入してきた俺を迷子扱いか？！前慤夸はそんなに甘くはなかったがね！？」
穂琥はその言葉を聞いて即座に薪の顔色を確認した。父親のこととなると薪の怒りレベルは跳ね上がると言っても過言ではない。
「そうか。それじゃぁオレが相当怒っているってわかっていないっていうことかな？」
果てしなく恐ろしい笑顔で薪が言う。その笑顔が穂琥にとっては死ぬほど怖い。いや、おそらく穂琥だけではなくこの場にいる、侵入してきた男を含めて恐怖を覚えたのだろう。
「貴様、何しに入ってきた？」

先ほどまでとは打って変わったその口調に男は恐怖一色で埋め尽くされていた。これが慤夸だということをどうやら悟ったようだった。
「まぁ、いい。名前は？」
「・・・アム」
言葉少なくアムは答えた。目が泳いで挙動不審になっている。穂琥はそれを哀れに思ってみていた。絶大なる慤夸を目の前にしてきっとどうしたらよいのか悩んでいるのだろう。
「それで？お前何しにここへ入ってきた？」
「ふん。もう用済みだ！」
アムは物凄い勢いで走り出した。穂琥はそれを見て呆然とした。無論、役夸たちも硬直していた。
「ははは！これさえあればこの世のすべての『悪』を手に入れることができる！」
アムの手にはなんだか奇妙な形をしたブレスレットのようなものが握られていた。アムの勝ち誇った表情を見て穂琥は先ほどの挙動不審は決して慤夸を、いや、薪を前におびえていたわけではなく、逃げる道を探していたのだと知った。そしてそれに気づけずにこのまま逃がしてしまうことを悔いた。隣にいる薪にどうしたものか相談しようと横を向く。
「・・・・あれ？」
すでにそこに薪はいなかった。
全く以て呆れる。慤夸が変わってこの世界も少しずつだが変わってきている。それをどこか勘違いしている阿呆どもが出てきた。現にこのアムという男も同じように、ただの阿呆だ。慤夸からの締め付けがなくなったからと言って前慤夸と比べて力が劣っているかといった、それは全く別の問題だ。にもかかわらず、最近のこういった馬鹿げた行為をする連中というのは、どうしてか慤夸が弱体化したと考えがちだ。そうやって己の首を絞めることになるというのに。
「ぐ・・・あ・・・」
走っていたはずのアムは気づいたら腹這いになり、その背には慤夸

が乗り押さえつけられる状態になっていた。全く体が動かない。完全に固定されてしまっていて足掻くための力すら入らない。
「あのなぁ。オレは慇夸なの。城も守れなくちゃ意味ないだろう？だから強くなくちゃいけないの。それにお前ごときがそれを使ったところで如何こう出来るものでもないさ」
アムは諦めたように体の力を抜いた。それを確認して薪は役夸にアムを預けアムから離れた。
「さて、そいつはどうしようかねぇ」
考えるそぶりを見せて薪はアムを見る。それから思いついたように言う。
「よし。じゃぁ城の中に一週間いてもらおうか」
「・・・何をやるの？」
「まぁ、いつかわかるよ」
薪は回答をはぐらかした。比較的薪は説明するよりも見せることができるのなら見せるタイプだ。一見百聞にしかず、と言ったところだろうか。牢のようなところに一週間程度入れておくだけでいいのか少し心配な気もする。先ほど薪が取り上げたのはどうやら悪いものを吸収してくれる助具らしい。そして定期的にその溜まった悪しきものを浄化するらしいが、そのマックスにたまった状態でアムは盗み出し、その悪しき力を逆に利用しようとしていたようだった。とはいっても、先ほど薪が述べたように、アム程度の力ではそれにかかっている『鍵』を開けることができないので使用することはできないのだが、その発想の危険性が在るため、何とか手を打つべきだと薪は考えていたようだ。

第十四話　ヒカク

やっとのことで部屋に戻ることのできた穂琥はふと思った疑問を薪にぶつける。
「薪は戦鎖だよね？」
「は？当たり前だろう」
「戦鎖と療蔚って両極端に分かれていてどちらか一方の技しか使えないんでしょう？」
「あぁ、そうだよ」
「どうして薪は戦鎖なのに療蔚の技がつかえるのよ？」
薪はあぁ、そのことかと少し楽しそうに笑った。
「母上の力だ」
薪にしては珍しく微笑んでいるような表情だったので穂琥はなんだかドキドキした。
　慤夸である巧伎は確かに最高峰の戦鎖であることは間違いない。そしてそれと同時に、その慤夸の妻となる女性も無論、最高峰でなくてはなるまい。つまり薪と穂琥の母、紫火はその療蔚の力が果てしなく強かった。それを受け継いだ穂琥もそれなりに強い力を有している。
「はずなんだがなぁ～」
「うるさい！まだ修行不足なの！」
薪の意地悪を受け流しながら話を聞く。
　そうしてそんな強い療蔚の力がもちろんのこと、薪の中にも存在している。それが表に出て来たために薪は特例として戦鎖ながらに療蔚の技を使うことができるという訳だ。ただし、いくら強い療蔚の母を持っていたからと言ってそう簡単に療蔚の技を使うことはまずできない。薪は思持として生まれているため、母体の中ですでに戦鎖としての基礎知識はほとんど見についている。故に生まれて間もなく、療蔚の基礎知識を入れることができた。それも要因の一つ

である。
「要するにチート能力だな」
「おう、言ってくれるな阿呆妹」
「うるさいし！」
そういった訳で薪は療蔚の技を扱うことができる。ただし、当然ではあるが、完全に扱うことはできない。あまりにも酷い怪我を治すことはできない。療蔚の力はやはり、戦鎖である薪の体を、魂石を受け入れてはくれないから。
「受け入れるって？」
「ん？技や、剣にも『意思』が存在するっていうことだよ」
技とは誰でもがすべての技を使うことができる訳では無い。もちろん、力の差も出てきてしまうが、それ以前に向き不向きが存在する。その向き不向きが技による意思で拒絶するか受諾するかと分かれるというのが薪の見解。
「なるほど。面白いこと言うねぇ」
「そうか？」
「うん。でもどうしてそんな風に分かれているの？」
「簡単な話さ。タイプが全く異なっているからだよ。鉛筆は書くもの、消しゴムは消すもの。そのどちらも互いの特徴を交換することはできないだろう？」
「あ、そうですね！」
「後はオレが戦鎖で療蔚よりも貴稀の性質が強いから無理に合わせることができるっていうだけのことだよ」
「なるほどぉ！」
納得した穂琥に小さく笑いかけてもう遅くなって暗い外を見てもう寝る様に穂琥を促した。穂琥が自分の部屋に戻って寝ることを少しだけ見送って薪はふらっと部屋を出る。
　薪の足が向かったのは刻紋。薄暗い血の匂いが浸み込んでいる恐ろしい場所。薪はあの時から、次世はこんなつらい思いをせずとも慤夸としての継承ができないか考えていた。

台の傍にある棚から小さな刀を取り出す。これこそ、薪の肩に慤夸紋を刻み込んだもの、その名を禰怨(ねおん)。想像を絶する痛みと苦痛を与える恐怖の刀。この禰怨に認められなかった慤夸は死ぬだけ。
「こんな小さな刀で・・・」
「薪様・・・!?こんなお時間にこんなところで何を・・・?もうお休みなられたかと」
「あぁ、昔を思い出してね」
薪は小さく笑って禰怨を棚に戻して振り返る。そこにいたのはあまり見覚えのない顔だった。
「ん、新人さんかな?」
「は、申し遅れました。わたくし、ジカと申します。モルバ家の者です」
「モルバ!?モルバがオレの城に・・・?」
薪は驚きの声を上げる。それから少し青ざめる。ジカは不思議そうな顔をしていたが、即座にはっとした顔をした。
「薪様、お気になさらないでください。わたくしの家系で起きたことは前慤夸がおやりになられたことです。今の慤夸であるあなた様とは何ともございません。薪様は素晴らしい方です。なのであなたの御側で働きたくてここで」
ジカの言葉に薪は胸がぐっと締め付けられるような感覚になった。それからジカに対して感謝の気持ちで満ちる。
「そうか。嬉しいよ、ありがとう」
「い、いえ!そんなとんでもございません!」
ジカは手を振る。薪はそんなジカへ挨拶をして部屋を出る。ジカも丁寧に深々と頭を下げて挨拶を返す。もう少し。あともう少し慤夸とそのほかの眞匏祇との距離が縮まればいいのにと願う薪だった。
ジガの家系、モルバとは昔、前慤夸、巧伎がとある理由で斬殺した因縁がある。薪はそれを必死で止めるべく走っていたが間に合わなかった。モルバ家のほとんどが息絶え、それに激しく心が泣いたのを今でも覚えている。慤夸を恨んでも仕方のない家系の者が慤夸

のもとで働いている。前慇夸と今の慇夸、自分との違いを把握し、理解してそれを受け止めてくれているのだと思うと、薪は嬉しくて心にできた大きな傷が少し和らぐような気がした。

第十五話　キライ

翌日、起床時間が来ても穂琥が起きてこないため、部屋へ起こしに向かった。ベッドで寝ている穂琥は少し寝苦しそうで心配して起こそうと手を伸ばすとその手をがっと穂琥に捕まれ驚いて固まる。
「ん～・・・タマゴが来る～！」
「たま・・・ご？」
「・・・ん・・・。ん？　あ、薪！おはよう♪」
「お、おはよう・・・」
呆然としている薪をよそに穂琥はん～と伸びを気持ちのいい朝だと言っている。おそらく先ほどの寝言のようなものを言った覚えはないだろう。薪はため息をついて穂琥にベッドから出て出かける準備をするように促す。
「今日は出かけるから少し忙しくなるぞ」
「了解であります！」
朝からテンション高いな、と思いながら薪は自分の部屋へ戻る。
着替えを済ませて出かける準備のできた穂琥を連れて薪は城から随分離れた広大な森へ足を運んだ。
「待ってくださーい！」
その森へ足を踏み入れようとすると男が走ってきた。息を切らせて男は薪達の目のまで留まった。不思議そうな眼で見ている薪と穂琥を見てはっとしたように自己紹介をした。
「わたしはキイナ＝デルバ＝ジェシカです。その森に入るのですか？」
「ジェシカねぇ～」
キイナのした質問は答えが返ってこず、代わりになにやら名前の方で考え事をしていることに首をかしげていた。キイナが再び同じ質問をしようとしたが、薪の声のほうが先だった。
「あ、思い出した、思い出した！ジェシカって『森の番』だな？」

「は、はい・・・。よく知っていますね・・・？」
薪は何かに納得したように頷きながらやっとキイナの質問に答える。
この森に入ってはならないと言ったその理由を問う。
「この森は危険です。貴方がどれほど腕がたつかは知りませんが、無茶です！」
あまりにもすごい勢いで言い切るので穂琥は逆に尋ねる。どうしてそこまで言い切ることができるのか。するとキイナは過去にもたくさんの眞匏祇がこの森へ足を踏み入れたが、何もできずに帰ってきており、ましてや無傷で帰ってきたものはいなかった。以前は役夸も入ったらしいがそれですら何もできずに帰ってきた。
「オレは役夸どもとは違うから大丈夫さ」
「な、なんと言う口を！」
一般の眞匏祇が役夸や長夸のことを悪く言ったり蔑んで言ったりしてはならないのが常識だ。だからこのキイナもあせったのだろう。
「平気さ。オレの元で働いている連中だ」
薪がそういうとキイナは一瞬で顔色を変えた。
「ここ、慤夸・・・？！　あぁ、よく見ればそれは藍帯（らんび）ですね」
「そういうことだ。それじゃ入れてもらうぞ」
薪はさっと翻り森へ足を進める。そして穂琥もその後を追う。
「はい。ご無事を祈ります。それと、エンド様」
キイナがそ呼んだ直後、穂琥の隣から薪が消えた。薪はキイナの胸倉をつかんで脅すような目つきでいる。
「オレを『エンド』と呼ぶな！」
「もも、申し訳ありません！！」
悲痛な表情でキイナは謝る。おそらく、前慤夸の圧力の恐怖のせいだろう。殺されると思うのだ。
「薪！」
穂琥が声を張って薪の名前を呼んで、正気に戻った薪が慌ててキイナを放した。
「悪い。父親と同じ名前で呼ばれたくないんだ・・・。すまない」

「い、いえ！貴方様が謝るようなことでは・・・・！」
薪はそっと微笑んで萎縮した。それから、キイナに何を言おうとしたのかを尋ねる。するとキイナは思い出したように森の声が聞こえたらその場を動かないようにと忠告した。
「もりのこえ？　ふん、わかった。忠告ありがとうな」
キイナは深く頭を下げる。それを見ながら薪と穂琥は森へ入っていく。
　穂琥は薪の横顔を確認しながら二つの疑問を解決したくてもやもやしていた。他者の感情に敏感な薪はそれを察知したのか、穂琥の眼を見る。
「何？」
「あ、いや。藍帯のことがいまいち、さぁ」
「あぁ」
薪はふっと笑う。薪の腰には衣服をまとめるための帯ともう一つ、異様に長い藍色の帯をつけている。それの意味は一般と慤夸を分けるためのものだった。
「あれ、それが違いなの？でも全然みんな知らないよね？」
「あぁ～、それはあれだ。あまりこっちにいないし、それを見せ付けて己が慤夸であることを言っていないからな」
なるほどと納得している穂琥だったがまだ薪がこちらを見ているために穂琥は少しだけ目線を放してそれから隠し事を薪に対して出来る訳も無いと諦めて笑う。
「あまり答えたくないかもしれないんだけど。答えたくなければ答えなくていいんだ。どうして『エンド』ってお父様の名前で呼ばれたくないの・・・？」
薪はとにかく父、巧伎の話を嫌う。だから穂琥としてはあまりしたくない質問だった。それでもその質問をするように催促したのは薪のほうだと自分に言い聞かせる。そんな穂琥の気遣いとは裏腹に薪は軽く答えた。
「嫌いだからだ。それ以外にない。あの方は生きとし生ける者とし

て最悪だ。やってはいけないことをし過ぎた。あんなヤ・・・いや、あの方とは一緒にされたくない」
ヤツ、と言おうとして無理やり修正したのが分かった。とにかく薪は父親を嫌っている。その理由が穂琥にはなんとなくでしか分からない。
　そのまま無言で歩き続けた。大分奥まで入ってきた時、木の葉同士が擦れる音が耳に入ってくる。ただ、その音がただ単に擦れてできている音ではないことを悟る。何か特別なもっと別なものがなっているように聞こえる。
「これが『森の声』だな」
「え？」
「なるほど。こりゃ、誰も何もしないで帰ってくるわけだ」
薪は勝手に解釈して納得しているようだった。全くそれを読み取れない穂琥としては頭にハテナを浮かべて薪の顔を見ていた。
「とりあえず落ち着くまでじっとしていたほうがいいな」
薪のその指令でしばらくの間じっとしていることにした。

第十六話　ワコウ

地響きが聞こえてきたのは木の葉の音が止んですぐだった。薪曰くこの森の『住人』達だと言っていた。その地響きはどんどんこちらに近づいてくる。そうして現れたのは巨木だった。よく見ればほかにもかなりの数がある。一人でに歩き止ると瞬時に地面に根をもぐりこませる。地球育ちが主流だった穂琥としてはあまりの衝撃的映像に軽く失神しそうだった。

「お前たちの『家』を荒らしてしまってすまなかった」

「そなた達は何をしにこの森に足を踏み入れた」

その巨木から声がした。そしてその声は質問ではなく脅しだった。圧倒的な力で制するが如く。だが、薪はそれに怯む訳もなくその巨木と話を進める。

「調査だ。ここにいるのがあんたたちだと分かったから頼みごとをして帰るつもりだ」

「頼み、とな。無駄じゃけ、帰れ。そなたのような小さな眞匏祇如きに何が出来る。何もせずでやる。じゃて、帰るのだ」

「そうもいかんな。それにオレはあんた達に比べたらあまり生きちゃいないが、小さくはない。お前らとて慤夸くらいは筋通すだろう？」

薪の言葉を聞いて巨木はわずかに反応した。しかし、呆れたような声を発する。

「慤夸。ここに足を踏み入れたのは数年前かね」

「２８年ほど前だ。その慤夸はもうこの世にはいない。それの息子がオレで、今はオレが慤夸だ」

「なんと。もう変わっていたのか。そなたらの命は短いのぅ」

どこか切なげに言う巨木の声に穂琥は身が震えるような感覚になった。永い時を刻む樹木。それが感ずる眞匏祇の命。どれ程小さいものなのだろう。

「それより。慤夸は死んだか。いや、前慤夸か。あやつは腐っておったのう」
絶大なる力を有している慤夸をこんな言い方で表現するなど、実際に考えれば言語道断だ。しかしこの巨木はそれを何の苦もなく言ってのけた。生命体自体がすでに異なるものだから支障がないのだろうか。
「あぁ、そうだな。オレもそう思うよ。さて、頼みを聞いて欲しいんだ」
「ほほほほ、そなたとは気が合いそうよのう。よかろう。慤夸の頼みとあっては聞かんわけにもいくまいよ」
巨木は言う。一応、慤夸の存在が格上であることは意識しているようだった。薪はその巨木たちの態度を見ながら頼みごとをする。
和口（わこう）と言う行為。先ほどの『森の声』と呼ばれていたものもその一つ。木々が互いを知るための会話を行うものだ。今でこそ、薪と穂琥の目の前に現れているが、本来なら安住した場所から動くことはまずない。今回のように侵入者があり、それを退けるために致し方なく動く場合もあるにはあるのだが。普段はその和口という行為によってその場を動く理由をなくしている。この木々にとってはとても大事な行為だった。ただ、それを傍で受ける住民にとっては迷惑なものだった。耳を塞がんばかりの巨大な音にひどいときは鼓膜が破れそうになるときもある。
「ほう。それで止めろと？」
「そこまでは言わない。ただ、定期的に行ってもらいたい。そうすれば予防ということが出来る。それと数も出来うるなら制限させてもらいたい。せめて一日に二回で抑えて欲しいんだ。頼めるだろうか？」
慎重に尋ねた薪の言葉に、巨木たちは一斉に笑い声を立てた。怪訝な顔をした薪に少しの謝罪を入れてから巨木は言う。
「遠慮深いのう。前慤夸など、1ヶ月もするなと言ってきおったよ。いやいや。よかろう。出来うるならば朝と夕にさせてもらえるとあ

りがたいんだがね？」
「わかった。本当に申し訳ない」
巨木はどうやら薪の思考は嫌いではないようで受け入れてくれた。
話がまとまったので帰ろうとしたが、巨木が妙な声を上げたので足を止めると、薪の顔をよく見るように近づいてきた。
「何か？」
「そなた、あの時の子供かな？冬の日の」
「・・・あぁ、そうだ。覚えていたのか」
「無論。たいしたものよの。さぁ、立ち去るがよい。愨夸といえどここの住人たちは手を煩わせるだろうからの」
それに頷き、薪と穂琥は森を抜ける。
話がついたことを森の外で待っていた森の番、キイナに報告をする。キイナはその報告を聞いてたいそう嬉しそうに微笑んでいた。それを見た薪の表情もどこか柔らかく、穂琥もそれが嬉しくなった。
城に向かっている間にずいぶんと暗くなってしまった。その間に薪に尋ねたことが少し気になっていた。先ほど、「そなた、あの時の子供かな？冬の日の」とあの巨木が言っていた。それは薪がまだ子供のころで、巧伎がまだ生きていたときの話。
よく、薪は城を抜け出していた。父の行いの酷さが主な原因でそれを何とかすべく、城下町に出て修正と謝罪を施していた。なにより、城にいたくなかった。本来ならば、薪が城を抜け出して叱られるのは長夸や役夸となってしまうが、さすがの巧伎も薪を相手にこの二役がどうにかできるとは思っていないらしく、周りの者に害を被る事はなかった。
そんな折、巧伎の一打撃を受けてやっとこの逃げ入った森が森の住人たちのいる場所だった。ふらふらな状態でいたためにさ迷って帰り道を失った。そんなときにあの巨木に出会い、つれられてその森を出ることが出来たと言う。
どれ程薪の成長過程が苦しかったのか、穂琥には想像も出来ない。それを薪は語ろうとしてくれない。欠如した記憶の一部。いつかそ

れを渡してくれるのを穂琥にはただ待っていることしか出来ないのがもどかしくて仕方なかった。
部屋に戻った穂琥はふっとため息をついて椅子に座る。少し小さい机。子供の雰囲気を残したままの部屋。自分はここで成長していた。それを思うとなんとも不思議な気がした。自分のそんな部屋をあさって机の引き出しに紙が入っていることに気付いた。覚束ない文字が羅列している。
『にさいのわたし。おおきくなったわたし。しんがとてもくるしそうだよ。たすけてあげて。いまのわたしにはなにもできないけど。おおきなわたしならたすけられる？おとうさまはいつもこわいの。しんにだけこわいの。おかあさまもずっとがまんしているの。おねがいします』
文脈もひどくまとまりがない。それでも薪のことをひどく思っていることがよく伝わった。記憶がないからなんともいえない。それでもこの文からは自分の心を感じることが出来る。
扉をたたくノック音。穂琥ははっとしていつの間にか伝っていた涙を慌ててぬぐった。
「入るぞ」
扉を開けて入ってきたのは薪。タイミングとしてどうして今入ってきたのか文句も言いたい気分になったがそこは抑えて穂琥は頷いた。薪はすたすたと中に入ってきて箪笥の上にある小さな箱を手にした。
「悪いな。この部屋を使っていなかったらここに保管していたのを忘れていた。もらっていく・・・穂琥、どうした？」
顔を上げて穂琥の顔を見て、驚いたような声を上げた。
「な、なんでもない」
きっと薪にはばれたのだろう。それでもなんでもないとこちらがさえぎれば薪はそれ以上の追求はしてこない。薪は、そのまま部屋を出ようとする。そんな薪を穂琥は呼び止める。
「待って。私、薪が慤夸紋を刻まれた後、何度も薪のところに行ったよね？」

「思い出したのか、それ。まあ、そうだよ。様子見に来ていたみたいだな」
「私なりに・・・何とかしたくて・・・きっと・・・」
穂琥の様子を見て薪は少し驚いた表情をする。それから少しだけ眼を伏せて過去を見る眼をする。
「オレだってお前の気持ちが分からなかったわけじゃないさ。ただ、当時はかなりむかついた」
「え？」
「まぁ、今だから言える事だけどさ」
薪は扉のほうを向いてこちらを見ない。
　慤夸紋を刻まれて薪はあの地下室に閉じ込められていた。その間、時折穂琥が様子を見に来ることがあった。その度に巧伎が薪に眞稀を飛ばした。穂琥の同情を買うなと激怒して。
　薪にそんな意図があるわけもないが、巧伎はただ単に薪へ眞稀を飛ばす口実を見つけているだけのことを知っている。だから穂琥が自分の下へ繰れば眞稀を当てられることくらいすぐに理解する。しかし、穂琥がそれを眼にすることがないということもあって、穂琥は何度もやってくる。懲りずに何度も。
「当時はオレだけを追い込んでいることは一目瞭然だった。でも何で自分だけなんだって思った。ま、今思えばオレの力が強大だったから、何だけどさ。悪いな、変なこと言って。おやすみ」
薪はにっこりと笑って部屋を出て行った。その薪の笑みが今までに見たことないくらい優しくそして儚かったことに穂琥の鼓動が締め付けられた。胸を押さえてその鼓動を抑える。薪の感情は表にあまり出てこない。それがあそこまで露骨に出てくるとなると、余程のことなんだと悟るしかなかった。

第十七話　チガイ

さて、薪はどこにいるでしょう。朝起きてからずっと探しているのに全く見つからない。途中で役夸を見つけて声をかける。
「ねぇ、薪知らない？」
「え？！あ、い、いえ・・・。申し訳ありません」
「そっか。いやいや、謝ることないよ。ありがとう」
穂琥はさっと走り出す。そうして探し回っている間に例のごとく迷子になる穂琥。広すぎる城内では慣れていない穂琥にとっては迷宮。困り果てていると、笑い声が聞こえたのでそっとその聞こえた部屋の扉を開けると長夸たちが談笑していた。
「あれ？穂琥様？どうなさったのですか？」
長夸が気付き、他の長夸も振り向く。
「あ、薪を探していて・・・」
「薪様？また墓参りかな？」
長夸が言うと、他の長夸も笑い声を立てて同意していた。穂琥は自分の中に渦巻く違和感で呆然としていた。
「そうそう、たいてい見つからないときはあそこにいますよ！」
「そ、そう・・・。ありがとう」
穂琥は墓に行くべく、とにかく下に降りた。呆然としすぎて迷子になったことを言いそびれたのでとにかく下に行けば一階に行くことはできる。
　やっとのことで城外へ出ることができ、薪がいるかもしれないと思える墓へ足を運ぶと、やはり、薪はそこにいた。
「毎回、毎回、ここにいる見たいだけど、何を考えているのよ」
突然声をかけたのにもかかわらず薪は驚いた風もなくただそこに立っていた。まるで言いたくないと言うかのように。しかし、それに反して薪は口を開いた。
「オレは3歳の時にやってはならない過ちを犯した。その重さに耐

えられなくなるとここに来ているんだよ。落ち着くわけでも和むわけでも軽くなるわけでもない。むしろその気持ちを強くさせるだけだけど」
薪にしては信じられないくらい弱々しい言葉に穂琥は愕然とした。直に話すよと言って薪は会話を打ち切ってしまった。それ以上、この話を続けることは穂琥には出来ない。だから、今朝から感じている疑問をぶつけて話題を変えることにした。
「役夸と長夸でさ、薪に対する態度が違いすぎるんだけど。どうして？」
穂琥のその質問に、やっと薪はこちらを向いた。そして少し面白そうに顔を笑わせる。
「そらそうだろうな。今の長夸はオレがガキの頃の役夸だったヤツらだ。今の役夸はオレが比較的地球にいたとき、崖の向こうから集められた者たちだからな。今の慤夸と昔の慤夸と感覚はそんなに変わっていないのさ」
薪のその説明で納得がいった。どこか怯えているような態度をとる役夸と、平然としている長夸との差はそれか。小さい頃から薪のことを見続けてきた、『元』役夸たちだからこそ、今の薪の扱い方を知っているのだろう。
　納得している穂琥を前に薪はなぜ探していたのかを尋ねてきた。
「・・・・えと。もう！探すのに手間取って何で探していたか忘れちゃったよ！」
そういうと薪は笑った。それから少し前の話題を持ってきた。
「これも教えておこうか。気になっていたみたいだからな。ここにきたときに、ネムって子がいただろう？」
「うん」
ネムが発した言葉。『首をはねないでください！』と言うもの。案外それはこの世間にとってかなり重要なことだった。薪は石段を降りる。
「移動しよう」

そういって墓を後にする。
部屋に戻るとドンと椅子に腰を落して薪は一つのため息をついて穂琥をまっすぐに見る。時折この薪のまっすぐ見てくる眼に負けそうになるときがしばしばあるが、今回は負けないように目を張る。その努力を見てか、薪は小さく笑ってからは話し始めた。
薪がこの世に生を受けるよりも前からそういった行為は行われていた。慤夸に仇なすもの全ての首を落す。それが慤夸の統治の仕方でもあった。無論、それをするかどうかは慤夸しだい。だから今はそれを行っていないわけだ。そしてその首を撥ねることを黯御(あんご)と言っていた。
「名前までつけるたぁ、物好きだよ」
わずかに怒りと悲しみの混ざるその声に穂琥は額に力を入れる。そして、薪はさらにおのれの父親の行いを語る。
「アイ・・・あの方が行ったのはただの黯御ではないんだ」
黯御された者はその身を遺族に戻されることはなかった。
「あの方は遺体を供養するでも、処理するでもない。罪無き眞匏祇を無茶な理由で罰しその首を撥ね、その身を・・・」
薪の顔に怒りが見えた。純粋な怒り。こんな風に起こった薪の顔も珍しかった。でも、次の薪の言葉にそんなことなど吹っ飛ぶほどのことが盛り込まれていた。
「実験台として扱った」
あまりの衝撃的なことに言葉を失う。穂琥はただ、呆然として怒りに顔をゆがめる薪を見ることしか出来なかった。頭が思考しない。混乱する。死刑と宣告した相手を討ち、なおかつその身を実験台として扱うなど、ひどいにも程があるだろう。
「全てオレのせいなんだ。オレが生まれてこなければよかったのに」
薪が『生』を否定した。そのことに衝撃を受けた。どんなことがあろうと、薪はそれだけはしなかった。それが他者であろうが、己であろうが。
思持として生まれた薪を、特別視ないわけが無い。その実態を調

査するためだけに何千何万と、数え切れない眞匏祗を殺した。
「え、え、でもさ！首を撥ねるって薪が生まれる前からあったんでしょう？関係ないんじゃ・・・」
「いや、黯御自体は存在していた。ただ、実験台として行うようになったのが、オレの生誕後だ。それまでは落した後、遺族へ返していたんだ」
薪は悲しそうに目元をゆがませる。やろうと思えばとめることが出来たかもしれない。でも、自分が傷つくことが怖くて何も出来なかった。それが・・・。
「おかしいよ！」
薪の言葉を遮って穂琥が吠える。薪は驚いた表情をして穂琥を視る。
「みんな自分が優先だよ！それが普通だよ！そこまで気にする必要なんて無い！どこにも無い！心を持った生き物だもの！」
「・・・そうだね」
薪はそっと穂琥の頭に手を乗せる。いつもより眞稀の感じが尖っている気がした。その感覚がとても怖かった。揺れている薪。震える薪。それのどれも穂琥には急さする措置が無い。いつも助けてもらうだけで薪を助けることなんて穂琥には到底出来ない。それがもどかしくも悲しいことだった。過去に囚われている薪はきっとそこから動けていないのだろう。いつもしゃんとしている薪でも、実際ふたを開けてみればやっぱりみんなと何も変わらない。
「ねぇ、いつになったら教えてもらえるの・・・？」
弱い穂琥の声を聞いて薪は不安そうな表情で聞き返す。
「え・・・？何を言っているんだ・・・？」
「過去のこと。すごく辛い事だって分かっている。でも、私何も知らない。知ることが出来ない・・・。だから余計怖いし、辛いよ。薪に何があったのか知りたい！苦しいのは薪だけじゃないんだよ？！」
重たい沈黙が流れる。しかし、薪は小さくため息をついて腰を上げた。そしてついてくるように促した。少しためらったがぴりぴりと

する薪の眞稀が拒否を許してくれそうには無かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3676x/

眞匏祇

2011年10月20日09時12分発行